觀大亞細亞

第十五輯

XI
2

東洋文庫蔵書
113457
昭和五十二年九月五日

第十五輯 (自 昭和十三年 (第169回)
至 〃 十四年 (第180回)
〔各刊行月不明〕

169回 忘るべからざる事件
170回 王昭君の怨
171回 大同の点描
172回 應縣の点描
173回 曲阜と泰山
174回 大同善化寺の点描
175回 山東嶗山及博山附近
176回 大同古代建築の点描
177回 北京の点描
178回 南京の点描
179回 満洲古都風景
180回 中支風俗の点描

東洋文庫

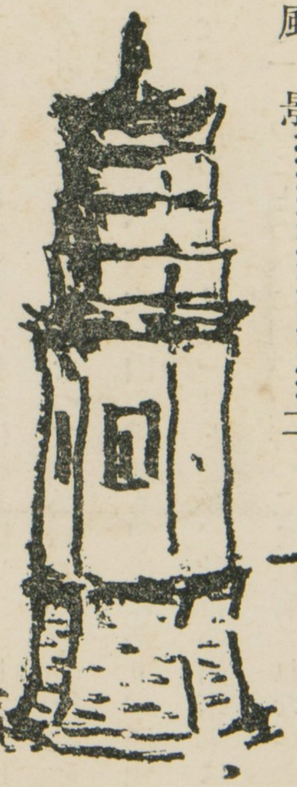
亞細亞大觀

忘るべからざる事件　第百六十九回
第十五輯壹回

内容

蘆口橋……一
蘆口風景……二
蘆口縣……五
塔……六
河……七
街……八
地……九
碑……三
景……四
む……十

一文字山の
一文字山の
通
通州の
通州の運
通州の
通州邦人遭難
通州の白塔を望
記事



忘るべからざる事件　島崎役治

撮影

（毎月一回發行）

大連市山縣通り一九三
發行所　亞細亞寫眞大觀社
電話②六二三五
振替大連七一八

版權所有　不許複製

編輯人　大連市山縣通一九三　青山捨夫
發行人　同　島崎役治
印刷人　大連市三河町二一　鈴木周哉
發行所　亞細亞寫眞大觀社

忘るべからざる事件

T M 生

それは昭和十二年七月七日夜のことであつた。大連では防空演習が來る十二日から行はれることになつてゐたので、市民の神經は尖銳化して、街頭の凉み臺では時局談が交はされてゐた時も時、夜の彼方から鈴の音が聞え、次第に間近くなつて來た。「號外だ」「號外らしい」「何の號外だらう」と凉臺から腰を浮かして號外配達夫の你やの來るのを待つたのであつた。日支衝突蘆口橋事變の報道がそれである。次に來たものは一文字山の戰爭である。北京の邦人が危い天津の日本租界が危いと云つて騒いでゐる間に、防空演習の日となつたのである。夜は燈火管制、警戒管制、非常管制が敷かれて、闇の街の中には、盲目の電車かごそごそと動き、目玉を塞いだ自動車が這ひ廻り防護團が市内の警戒に巡羅したのである。防空の聲はこの時市民に强く響いたのであつた。そして七月十六日の精靈流は遂に十七日に延期されて始めて市民はほつとしたのである。幸に支那の飛行機も大連の上空に現はれなかつたので、市民は安堵の胸を撫でた次第であつた。

斯くしてゐるうちに、不擴大方針を聲明し、局地解決を希ふた日本の好意は遂に受け入れられず、全支那事變となつたのである。だが、日本に殷汝耕を盟主とする冀東政府はまさかと思ひ安心してゐるところに、通州事變が起り、通州在留日本人の殆んどと云つてよい程、男女非戰鬪員が抗日冀東官憲と民衆によつて虐殺されたのである。遭難の報に鎭壓に馳せつけた、日本軍はその虐殺ぶりを見て憤激は、言語に絶するほどであつたのである。この時、日本側では殷汝耕よ何處と探し廻り、或は慘殺、拉致の說さへ出たが彼れは難を聞いて、日本側に通知することも忘れて、逃亡して身の安全を計つたことが後日になつて發覺して、その行動を日本人に不思議がられた。今となつては、蘆口橋事變も、一文字山の戰鬪も記憶にあり、通州事件も日本婦人を侮辱し虐殺した事變として記憶にあるが、日は一日と進み、社會の出來事は日一日と新しくなりつつあつて、何時までも一つのことのみに關心を持つことは宥されないのである。でも、吾等としては、昭和十二年七月七日を忘れ、蘆口橋を忘れ、一文字山を忘れ、通州事件を忘れ、北京を忘れ、天津襲撃事件を忘れてはならぬのである。寫眞で見る現地はいと和やかであるが、その和やかに見ゆるところは何かと考へる時、同邦の血と肉のお陰と云ふことである通州の白塔に聞けば、文那兵の亂暴は今に始まつたことではありません、私などはしよつちゆう痛い目に遭いましたよと云つてゐるが、それにしても王道を聞き德政を聞いて來た日本人には、彼等不逞の軍兵の日常茶飯事を默認することは出來ないのである。世界人類の平和を齊らす意味に於てである。

蘆溝橋
（北支）

昭和十二年七月七日支那官兵は、蘆溝橋附近にある日本軍に向つて發砲した。これが即ち支那事變の勃發であり、これを蘆溝橋事件と云のである。日本の不擴大主義による局部解決も水の泡、遂に支那事變と一變し、日本は北支に、中支に、南支に、海南島に兵を向けざるを得なくなり、今や全支日本軍の爆彈の届かさるところはない位い進展し、抗日軍の壞滅と同時に親日政權が誕生し、興亞の和平が齎らされんとしてゐるのである。それが蘆溝橋に於ける支那軍の一發の銃聲が原因と思へば驚かざるを得ない。（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯の一回の一）

蘆口橋風景

（北　支）

寫眞は蘆口橋を示したものである。この橋の石材は總て大理石をもつて築かれたもので、唐獅子、駱駝、馬、犬の石調は實に壯觀なもので、支那ならではみられぬ偉大さである。橋上、人か通り、自動車が走り、黄包子が通ひ、馬が通りしてゐるのどかなものである。此處が支那事變の發祥地とは見られぬ和な風景で、雍正と命じて石欄を架せしむ工起して四ケ年即ち明昌三年の秋、工竣る長さ六百六十尺、古來著名の大橋であり明清に至つて重修と記されてゐる。

（印畫の製複を禁ず）

一文字山の碑

（北　支）

一文字山の碑は、帝國在鄉軍人會北京分會に依つて昭和十三年七月七日支那事變一周年記念日に建立されたものである。碑面の文字は「支那事變發端之地」としてあつて、裏面には「支那事變勃發一周年記念の日に方り北平在留邦人之を建つ」としてある。碑文の文字は當時この碑のあるところに立つて指揮した牟田口部隊長の筆蹟を刻せるものである。

（印畫の複製を禁ず）

一文字山

（北　支）

一文字山と云つても山ではない、謂は低い丘陵で、この寫眞は全景を示したものである。寫眞向つて右の柳葉の茂つたところが、支那事變發端當時、陸軍歩兵軍曹長谷川喜藏氏戰死の地である。

（印畫の複製を禁ず）

通縣

（北文）

在つて大運河の畔に瀕し古來北京の咽喉を扼せる東路の一要衝たる地位にありしが近時鐵道の開通に依つて其の生命を奪はれ遂に昔日の成觀を見る能はざりしが、北支自治獨立の先驅をなしたる冀東防共自治政府が通縣に設けられ、一躍世人の注視を惹くに至り更に北支事變の勃發と共に我が同胞の悲慘なる虐殺事件等起りしは吾々尚を當時をせ想起せしめる古い歴史を有すべきである。通縣は北平東陽門外から四十支里の地點に在せる道路の開通に依つて其の生命を奪はれ遂に昔日の成觀を見る能はざりしが、北支自治獨立の先驅をなしたる冀東防共自治政府が通縣に設け一躍世人の注視を惹くに至り更に北支事變の勃發と共に我が同胞の悲慘なる虐殺事件等起りしは吾々尚を當時をせ想起せしめる古い歴史を有すべきである。通縣は通縣中央の鐘樓で街相の風雅さも味うべき土地柄として（印畫の複製を禁ず）

通州の塔

（北支）

通州の白塔である。北京を離れて通州に向ふ者には、この白塔が目標でありまた懐かしいものてある。遠く後周代の建築として、十三層の燃燈舎利佛塔として有名な塔である。これに依つて考へるに往昔佛教が盛んであつたことが伺はれる。

（印畫の複製を禁ず）

通州の運河（北支）

通州の運河は人口水路として八百余哩あり世界第一の運河であつて、通州はその終点となつてゐる。古來、この運河によつて國内交易が行はれ、中南支方面の文物は始んでこの水路によつて運び込まれたと云つてもよい位利用されたものである。

（印刷の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯の一回の七）

通州の街

（北支）

通州は昔から北京に次ぐ繁華な地でまた熱河地方への通路であつた、從つて人の去來も多く街は殷賑を極めたものであつた。現在としても頗る繁華な都市で、商業は盛んである寫眞は夏の通州市街風景である。

（印畫の複製を禁ず）

通州邦人遭難地

（北　支）

昭和十二年眞夏、日支戰端を開く時冀東は殷汝耕の支配するところとして、日本人は安住してゐたところ、政府の警官、官兵等は秘かに謀つて日本軍の手薄をねらつて、深夜邦人襲撃をなし邦人男女の非戰闘員を城壁外に拉致し虐殺慘殺をほしいままにしたところである。寫眞に映ずる地形から見ても昔の刑場である。此處を訪問することを思はせ、陰慘な氣を起させる。四邊を見廻する者、柵内の木標の文字を讀み、憤然たらざるを得ない氣がする。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯の一回の九）

通州白塔を望む
（北　支）

通州が昔し北京より文化が發達し、佛教が盛んであつたことばいろいろの事跡に依つても相像されるが、この白塔は、その文化殷盛を物語る唯一の史料である。夏日擴大な蓮池の向ふに聳ゆる燃燈舍利佛の十三層の白塔を望む時、後周時代の氣分に侵ることが出来る。北京方面視察者の一度は技を曳き足をはこばしてよいてところである。（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯の一回の十）

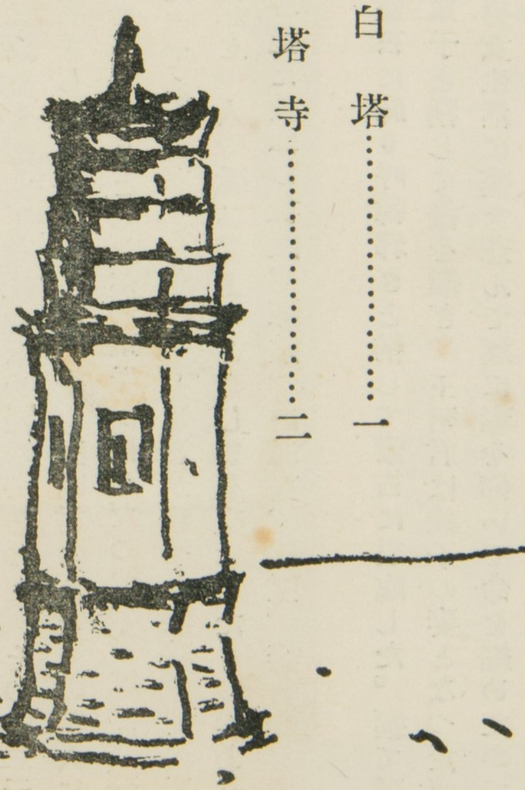
亞細亞大觀

王昭君の怨

第百七十回
第十五輯貳回

内容

厚和の白塔……一
厚和の五塔寺……二
王昭君の墓……三
王昭君の墓より陰山を望む……四
蒙古の軍船……五
包頭黄河の入日……六
歸化城の清眞寺……七
歸化城の五塔寺……八
歸化城喇嘛寺の牌樓……九
歸化城の市街……十



記事

王昭君の墓
王昭君の墓より陰山を望む
蒙古の軍船
包頭黄河の入日
歸化城の清眞寺
歸化城の五塔寺
歸化城喇嘛寺の牌樓
歸化城の市街

森田富義
島崎役治

撮影

（毎月一回發行）

大連市山縣通り一九三
發行所　亞細亞寫眞大觀社
電話②六二三五
振替大連七一八

版權所有　不許複製

編輯人　大連市山縣通一九三　青山捨夫
發行人　同　島崎役治
印刷人　大連市三河町二一　鈴木周哉
發行所　亞細亞寫眞大觀社

王昭君の怨

森田富義

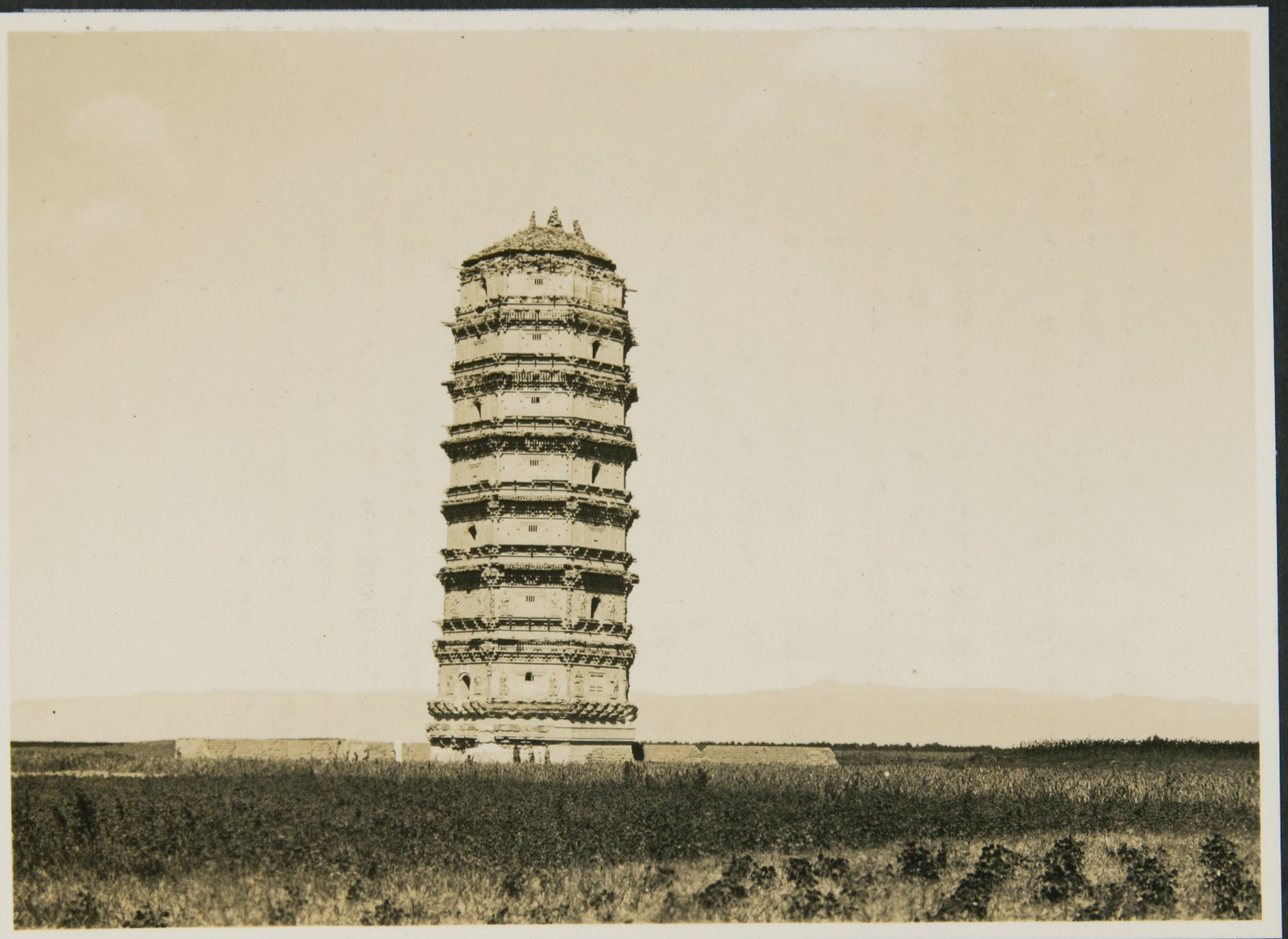
漢の元帝は頗る好色多婬の帝王で、後宮には三千人の美妃を集めて日夜女色に耽溺してゐたと云ふことが支那情艶史のうちに殘つてゐる。事實は如何としても、三千人の美妃を宮廷の奥に圍ふてゐたことしても、それが悉く夜の伽をしたのではないことは、閨怨に泣き暮した女性が多かつたと云ふ口碑によつても明らかである。美妃のうちには、帝の一夜の伽に出たことを光榮として、後宮に一房を賜つて一代を榮華に暮した女性もあつたが、また、飯焚女、洗濯婆、針女の如き賤しい仕事をして、元帝の寵を得るは愚なことその玉顏さへ拜せずして一生を終つた女性も澤山あつた。それは元帝としても、後宮に三千人の美妃を狩り集めはしたものの、毎夜の伽をする者を帝みづから選らんだものではなく、お抱の畫工に命じて、美妃の肖像を寫させ、その肖像繪を見て、これはと思ふ美人を探して伽を命じたのであつた。だから、帝の寵を得るか得ないかは畫工の彩管の如何によつて定るので、三千の美妃のうちには、如何とかして帝の寵を得んとして、畫工に賄路を贈つて、醜を美に描かせて本望を達せんとする者が多かつた。

ところが、後宮の美妃の一人に王昭君と云ふ絶世の美人があつた。齊の王襄の娘であつたが、容姿端麗で美人の聞えが高かつたので、國内の美男が競ふて嫁にせんとしたが、父は娘の容姿から榮達せしめんと考へ、多の婿希望を一蹴して、元帝に献じたのであつた。それは王昭君が十七の時で、春秋の花も恥ろう位いで、蕾まず、開かずと云ふ年ごろであつた。それほどの美人であつたから、後宮に入つたその日からでも帝の寵を一身に受くべきであつたのに、どうしたものか、一年經つても二年經つても帝のお召しに預ることはなかつた。それは王昭君が已の美をたのんで畫工に賄路を贈らなかつたので、いつも不容貌な肖像畫を書いて帝に差出したので、帝の鑑識に叶はなかつたのであつた。斯くして何年か帝の寵を待ち、閨怨に泣いてゐたのであつた。

それはある年であつた。蒙古から單于が漢廷に來貢した時、帝は單于に財寶かゝさなくばその好むものを贈らんとしたが、單于は財寶を辭して美妃を求めたのであつた。その時單于は後宮の美妃で憂を含む一美人王昭君を名ざして求めたところ、帝も王昭君のあまりの美人に吃驚して來貢の返禮として何か他に見替えさせやうとしたが、單于が拒んだので、帝は「朕過てり」と獨語して、王昭君を單于に與へたのであつた。この時、王昭君が歌つた怨曠思維の歌は閨怨悲嘆の歌として後宮三千の美妃の怨を一人で歌ひ畫工のよこしまを呪詛したものであつた。帝はその歌を聞くや大いに怒つて、お抱え畫工の杜陵、陳敞、白龍寛、楊望、樊育等を處罰して憂を晴したのであつた。

單于は漢室から美女王昭君を得て蒙古に歸り呼韓邪ぎと稱して蒙古に君臨した。軈て呼韓邪沒してその子雕陶莫皐が復株纍若鞮單于と稱して後を繼ぎ、王昭君は義子の妻となつたが、蒙古の風習とは云へ鬼畜に等しいその男女生活に嘆き悲んで逐に毒を仰いで命を縮めたのであつた實に王昭君は美人薄命の言葉を地で行つたものであつた。

墓は、厚和の南二十里黑水沿岸の小丘にあるが、碑面には、「漢明妃昭君之墓」と刻しその兩側には各一つ宛の墓がある。多分婢の殉じたものであらう、このあたり妙なことは、白草繁茂してゐるが、王昭君の墓のあたりのみ青草が青々と茂つてゐるので、附近住民は青塚と呼んで漢家の美人昭君の悲しい譚りを傳へてゐる。



厚和の白塔

（蒙　疆）

この白塔は厚和驛の東方十八粁の地点にある白塔站の南方遠く畑中に聳えてゐる。普通白塔と云つてゐるが、學者はこれを萬部華嚴經塔となづけてゐる。こゝは遼金時代の豐州の古地であつて建築學上に於ける精細な研究材料と云つてゐる。この地は遼金時代の豐州の古地であつて現に土城址も殘つてゐるところから見ればいづれも盛建築さあつたのに時代豐州が大都會で佛教文化が汪たところから、斯くも由緒ある塔が建てられたのであらう。金の時代に重修したのであるさうだから創建は遼時代と云ふのが記錄があるさうだから確實であらう。

（印書の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯の二回の一）

厚和の五塔寺

（蒙　疆）

寫眞は蒙疆厚和に存在する喇嘛寺であつて豪壯な塔が五つあるところから普通これを五塔寺と云つてゐる。蒙古人の宗教と云へば喇嘛教が主であつて、喇嘛寺のあるところには必ず蒙古人が住し、蒙古人の住むところには必ず喇嘛寺があるほど、蒙古人と喇嘛教とは關係が深いのである。だから沙漠未開の地でも、喇嘛塔が建築され信仰の的となつてゐるものである。特に厚和の五塔寺は豪壯雄大で有名なも

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀　十五輯の二回の二）

王昭君の墓

（蒙　疆）

漢の元帝には三千人の後宮美妃があつた。絶世の佳人王昭君もその一人であつたが、美貌を誇つて畫工に賄路を贈らなかつたので遂に元帝の寵を得ることが出來ず悶々として日を送つてゐた。その時匈奴呼韓邪が漢朝に來朝し貢を捧げた時、元帝より王昭君を賞つて歸國し妃となつた。呼韓邪が死ぬとその子の妃となつて暮したが鬼畜等しい蕃風に堪べず逐に毒死した。墓は厚和の南二十里黑水沿岸にあるが、碑には「漢明妃昭君之墓」と刻してあるが、墳のあたり白草繁茂してゐるので青塚とも云つてゐる。附近一帶青青した草が茂つてゐるので青塚とも云つてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯の二回の三）

王昭君の墓より陰山を望む

（蒙　疆）

厚和城の南二十里、黒水沿岸の小丘にある漢室の美妃王昭君の墓に立つて望めば、眼界の限り蒙疆大平原で遥かに遠く霞むのが陰山山脈である。閨怨に泣けごも漢室後宮第一の佳人として元帝をして「朕誤てり」の一語を洩らさしめ、果敢ない生涯を送つたとしても、戯的最後に後人をして涙を流さしめたとすると、鬼となつてもこの雄大な景を眺める昭君の靈は果して不幸であるかである。（印畫の複製を禁ず）

蒙古の軍船

（蠹　蒙）

蒙古に如河多軍いうい

北支と中支との間を流れる黄河はその源を蒙疆に發してゐて、蒙疆の包頭は黄河の沿岸にある。河口から何百里の上流なれども、蒙古の黄土を流してゐるので水は黄色で所謂黄河の名にそむかない。この邊り既に一望海の如く江上に舟を浮べて交易に利してゐる者が多い、寫眞は黄河の護りである包頭の蒙古の軍船である。構造は一見したところ變徹もないが船底は平でごんな淺いところでも浮ぶやうに出來てゐる。

（印畫の複製を禁ず）

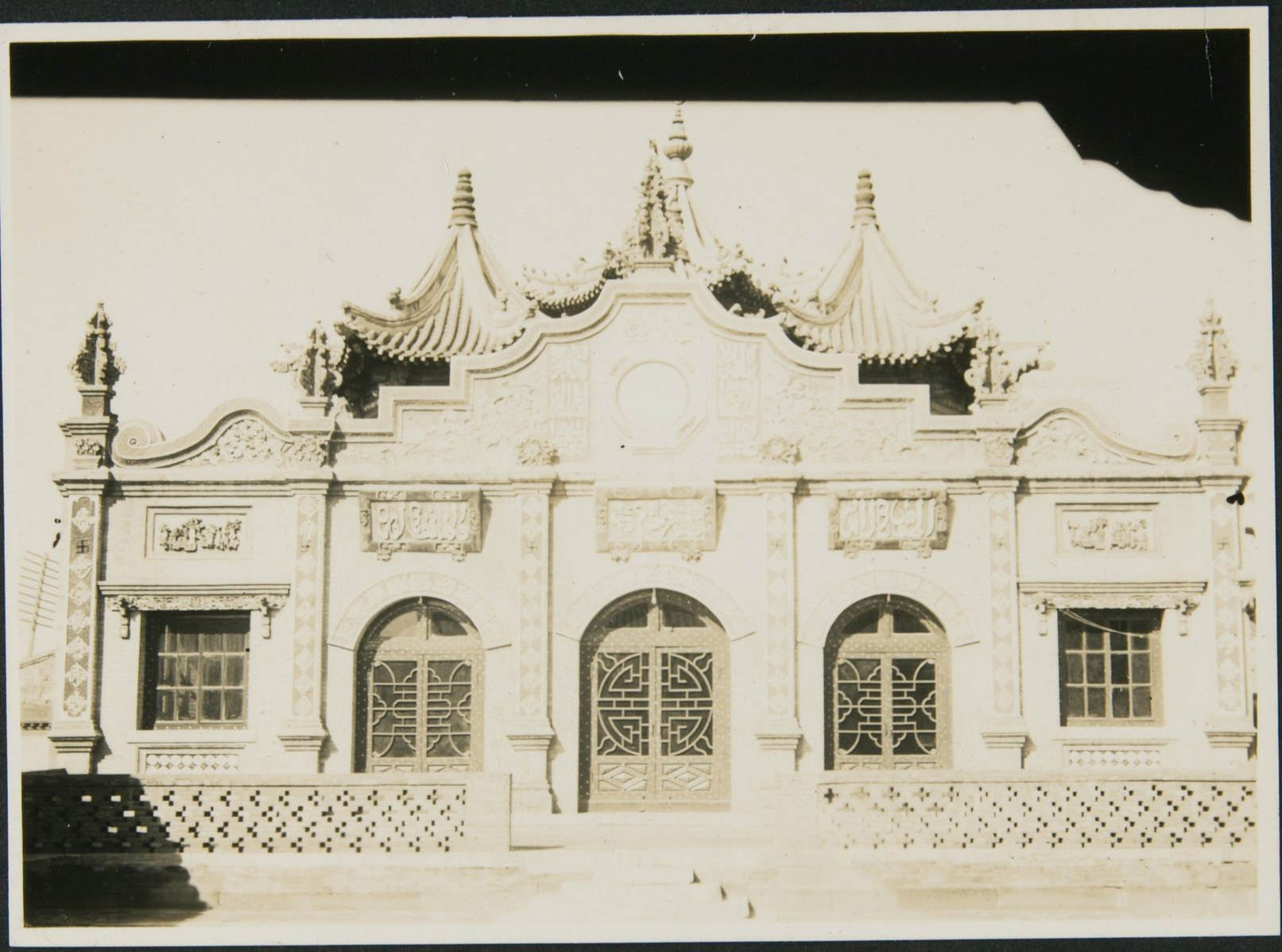
包頭黄河の入日

（蒙　疆）

蒙疆を流れる黄河は泥海の如く頗る雄大である。一大平原の中を黙々として流れてゐるさへ雄大であるのに、紅い大きな太陽が西の平原に沈む時、その陽光が泥海に照り映ゆる色彩もまた雄大であり、大きな美觀である。山岳島嶼の景觀もいいが、蒙古に來つてこの美觀に接する時、如何に自然が雄大で美であるかをうなづくことが出來る。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯の二回の六）



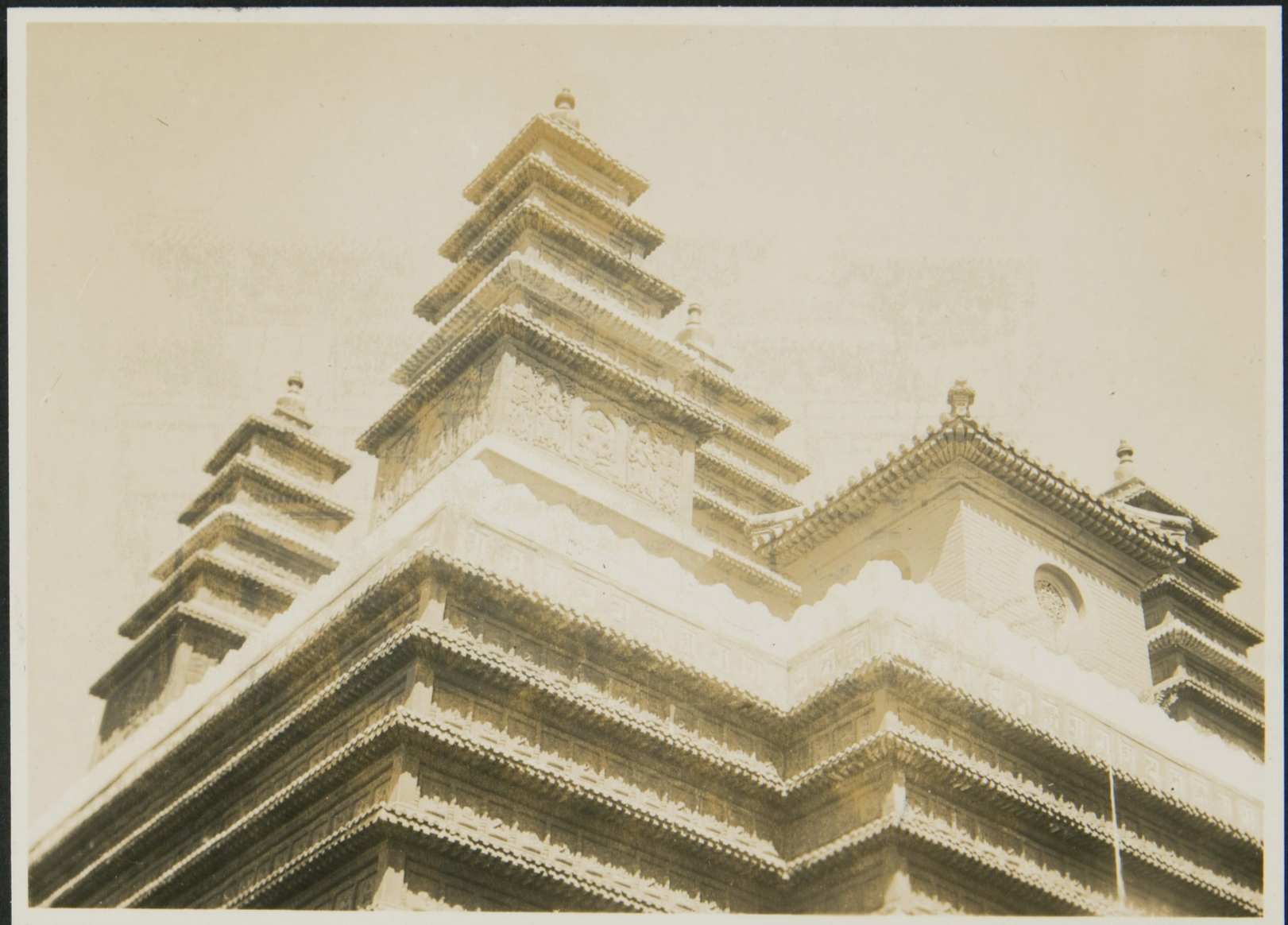
歸化城の清眞寺

（蒙　疆）

蒙疆地方に於ける回教信仰は實に驚く程である。この地方を旅行する者は必ず清眞寺と云ふ特徴ある建物を見る、これが即ち回々教の寺院である。歸化城にも寫眞に見る如きこの土地としては豪壯過ぎるほど立派な清眞寺があつて住民の信仰の的となつてゐる。斯やうに、神を信じ神を念じて生活の糧として終止し得る回教民族は實に幸福であると云ひ得るであらう。

（印書の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯の二回の七）



歸化城の五塔寺

（蒙　疆）

厚和にも五塔寺と稱する宏大な白塔があり喇摩教徒の信仰を受けてゐるが、歸化城にも五塔寺なる名稱の寺院がある。斯る蒙疆僻遠の地に、宏大な一廓を有し、その市街とは不調和なほど立派な構への寺院を有するのは全く宗教の力である。寫眞は宏大な地構をしてゐる歸化城の五塔寺である。

（印畫の複禁を禁ず）

歸化城喇嘛寺の牌樓

（蒙　疆）

蒙疆地方宗教の力の偉大なることは驚くほどで、同教の清眞寺、喇嘛教の喇嘛寺はその信仰の力を表はす最も雄なるものである。

この寫眞は歸化城にある喇嘛教寺院の碑樓であるが、その古風な建築と土地柄に似合はしからぬ宏壯さには旅人の目をそばだたしめる。

（印畫の複製を禁ず）

歸化城の市街

（蒙　疆）

歸化城は蒙疆地方に於ける大都會で西二十四町、南北三十六町の大市街である。この街の一番繁華なところは北門から古公署、特別市公署、日本領事館、日本憲兵隊、蒙聯盟、特置物は、善隣協會、蒙疆銀行、實業銀行、厚和醫院等である。

市街は東西に廣く一直線の馬路である。道幅も極めて廣く、商家が軒をならべ商賣は殷盛を極めてゐる。繁華街は高層建築の櫛比してゐる大南街である。寫眞は寫家が特に撰んだ大南街の主なる建物を示したものである。城内の

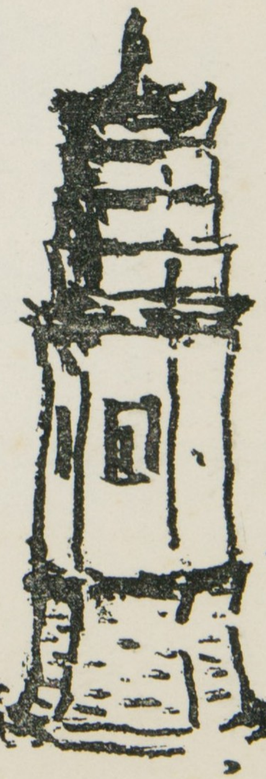
（印書の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯の二回の十）

亞細亞大觀

大同の点描

第百七十壹回
第十五輯參回



内容

大同の朝景色……一
大同上華嚴寺の壁畫……二
大同の牌樓……三
大同の古塔……四
大同の石窟東側……五
大同石窟の西側……六
大同の西瓜市……七
大同の東門……八
大同の大仙廟……九
大同南善化寺の佛像……十

記事

雲崗石窟の保護……森田富義

撮影……島崎役治

大連市山縣通り一九三
發行所　亞細亞寫眞大觀社
電話②六二三五
振替大連七一一八

版權所有　不許複製

編輯人　大連市山縣通一九三　青山捨夫
發行人　同　島崎役治
印刷人　大連市三河町二一　鈴木周哉
發行所　亞細亞寫眞大觀社

（毎月一回發行）

雲崗石窟の保護

森田富義

昭和十二年、支那事變の際日本軍は、張家口から大同に兵を進め、大同を陷れると同時に、大同雲崗にある石窟の保存を嚴重に守つた。これは明治三十五年伊東忠太博士が發見して世界の學界に紹介した支那三大石窟佛の一つとして有名なものであつたからである。

この石窟の佛像は北魏時代(約一千五百年前)の彫刻と指定され、美術的價値の非常に高いもので、萬人の欲してやまぬものである。昔し、北魏の大武帝は四方を平定して、都を平城(大同)に定めたので、この地が政治經濟學術宗教が盛んになつたのは尤もなことで、わけて佛教が盛んで、宗教の信仰的精神を加味した技術、藝術、美術が特に發達したのである。技術方面では古塔、寺院等の古建築が殘存し、漸くその形骸を殘し、その荒廢を惜しまれてゐるが、美術藝術としては、城内の寺院に立派に殘存する佛像、壁畵等がその技の發達を譚つてゐるが、雲崗石窟内に存在する大小數萬の佛像こそ支那が世界に誇る佛教美術の尤たるものである。さればこそ、日本軍は大同を陷るゝ同時にこの貴重なる雲崗の保存に任じたのである

この石窟は、大武帝が平城を首都と定めて玄孫孝文帝が洛陽に僃都する迄での間に、佛弟子曇曜が文成帝に進白して太祖以下五帝の靈位供養のために五大石窟を開窟開鑿し洞窟内に大小の石佛を刻したのがその端緒となつたので、爾來支那では北齊隋唐時代までこの石窟開鑿が盛んに行はれ貴重な石佛を殘したものである。

由來支那の總る古建築、古美術等は兵火のために焼かれ、或は盗人のために持ち去られ、荒廢の果はその形さへ殘らず、口碑傳説にその存在せるこゝのみを傳へ、史家を惜涙せしめたものが尠くない。故に日本軍はわざわざ兵力を割いて貴重なる雲崗石窟の保存に當つたのである若しこれを軍が嚴重に保護しなかつたら、物慾に耽る骨董商と稱する者が入込んで、利慾の爲めに破壊したかもしれないのである。或は盗人が搬出して遠く海の外に運んだかも知れないのである。

だが幸にも雲崗石窟は完全に保護され、燦然たる日章旗の下に、北魏の美術が高尚優美な匂を放つてゐるので。

大同の朝景色

（蒙　疆）

寫眞は大同東門の朝の景である。漸く夜が明け初めるころ、驛亭に宿した旅人は、朝の冷風のうちに驛を發足するのである、東の和門陽の古建築が朝靄のうちにかすかに浮ぶを後に見て牛車に荷を積んで山西平原をこことと蒙古路さして往く姿は寂しいものである

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀　十五輯の三回の一）

大同の牌樓

（蒙疆）

この牌樓は大同城内中央鼓樓の附近の辻にある。兩側の軒別に日章旗な揭揚してゐが、これは支那事變により大同が日本〇軍の守備のもとにあるところで、平和な牌樓下に軍人の姿のあるのもなつかしいものである。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯の三回の三）

大同の古塔

（蒙　疆）

この寫眞は大同城の東部城壁附近にある高さ二十尺位いの古塔である。妙味を添える口碑はないが、光緒年間に揮源人の篤志家が建てたものと云つてゐる。この塔の存在の理由としては旅行者の目標にあるもので、旅人は遙かにこの塔を發見して、揮源に近きを知り疲れた足に元氣を取り直して足を急いだのである。塔には『白居一宣統康戌歲貢揮源人』の文字のみしか發見出來ない。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀　十五輯の三回の四）

大同石窟東側

（蒙　疆）

大同雲崗第一洞入口東側を寫したものである。中にある佛像は六朝時代の調刻で、これを六朝風と云つてゐる。北魏の首都大同の佛教文化の華なりしころの遺跡で、信仰に燃ゆる精神文化の偉大な力が表現されてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯の三回の五）

大同石窟西側

（蒙　疆）

寫眞は大同雲崗石窟の第一洞入口の西側を寫したものである。洞窟内の佛像は北魏時代（千五百年前）のもので世界最古の石刻物として有名であるばかりでなく、その美術的價値も非常に高い、作者は沙門曇曜が四十年の歳月を費した程で雲崗の石窟佛として世に知られてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

大同の西瓜市

（蒙　疆）

曠漠たる支那、わけて蒙疆地方は世界の産庫さへ云はれる位いのところで、從つて農産物も多い、寫眞は盛夏の黎明に、大同城内に開かれる野菜市場のうちの西瓜市の光景である。眞晝の炎天に比べて、夜の冷さは大陸特有の氣候である。大同城附近の百姓は早旦その冷えきつた西瓜を市に運んで商ふのである。盛夏清麗な飲料水に乏しい時、旅行者に限らず城内の商民はその冷えきつた西瓜で渇をうるほすのである。炎天に照りつけられて熟した西瓜の味は他て味はれぬ甘味がある。

（印書の複製を禁ず）

大同の東門

（蒙　疆）

大同城の城壁には、東西南北に城門がある城門は明の洪洪五年大将軍徐達が建築したもので、東を和陽門、南を永泰門、西を清還門、北を武定門と云つて甕城（枡形）の三層樓である。寫眞は東の和陽門であるが、今では何れも破損にまかせて見るかげもないが、按ずるに建築當初は大同文化の華かなりしころだから、輪奐の美を誇つたものであらう。

（印畵の複製を禁ず）

大同大仙廟

（蒙　疆）

大仙廟は大同の西門と北門の中間に孤立する古塔である。碑面には靈應寶塔大仙廟と刻し、經理郁元吳德同王喜慕化、大清光緒二十五年四月立としてある。傳說によると、王喜と云ふ僧が座禪を組んだまま絕食仙化した、附近の住民は王喜を生きながらの廟さんとして塔を建て諸々の祈願をした、すると靈驗あらたかなので靈應寶塔、或は大仙廟と云つて諸願の參詣人が絕えない、今でも道士と僧が附近に庵を構えて參詣人の接待をしてゐる。

（印畫の複複を禁ず）

（亞細亞大觀　十五輯の三回の九）

大同南善化寺の佛像

（蒙　疆）

南善化寺は大同城の東門附近にある。寺は金時代の創建で本堂内の装飾は寫眞にも現はれてゐる如く頗る善美を極めたもので、その中に安置された佛像の美術的價値は相當のものである。

（印書の複製を禁ず）

（亞細亞大觀　十五輯の三回の十）

亞細亞大觀

應縣の点描

第百七十貳回
第十五輯四回

内容

應縣城よりの遠望……一
應縣の佛宮寺（一）……二
應縣の佛宮寺（二）……三
應縣の佛宮寺（三）……四
應縣の佛宮寺（四）……五
應縣の佛宮寺（五）……六
應縣の佛宮寺（六）……七
應縣の唐獅子……八
應縣の佛宮寺（七）……九
應縣の八角の塔……十

記事

遼代建築と木塔の話　森田富義

撮影　島崎役治

大連市山縣通り一九三
發行所　亞細亞寫眞大觀社
電話②六二三五
振替大連七一一八

（毎月一回發行）

版權所有　不許複製

編輯人　大連市山縣通一九三　青山捨夫
發行人　同　島崎役治
印刷人　大連市三河町二一　鈴木周哉
發行所　亞細亞寫眞大觀社

遼代建築と木塔の話

森田富義

應縣に存在する佛宮寺木塔が世界の學界に紹介されたのは、明治三十五年、日本の伊東忠太博士が山西省内を踏査して發見してからである。當時、伊東博士は建築の樣式その他のことから、遼時代の建物で、支那でも九百年以上を經過したもので、木造建築こしては稍々古いものに屬する。學術的に研究材料となるものであるこ云つたが、當時一般の學術研究家は、遼時代の建築物に對する智識も乏しく、遼時代建築物の特徵などに就ても知るものがなかつたので、直ちに信ずるものはなかつた。だが、最近になつて、日本の學者間にも遼時代建築物の特徵も知ることになり、應縣の佛宮寺木塔は、伊東博士の鑑定のこほり、遼時代の建築なることを認めるやうになり、改めて實地踏査をしたいこ云ふ希望するものもあつたが、支那の排日その他の關係で、支那の奥地旅行は意の如くならなかつたので、今日まで、調査に行く者はなかつたところが幸にも、支那事變に依り北支那が日本軍の占領地區となつたので、山西省方面の學術研究の實地踏査旅行が出來るやうになつたので、日本の學者達も、漸く支那の風物なり、古建築を研究出來るここになつた。尤も、鳥居龍藏博士一行の考古學踏査隊のうちには、佛宮寺を調査した人もあり、また、北京の造營學社でも充分の研究を遂げてゐると云ふことであるが、どれもその研究を發表してゐないから參考こすべきものもないと云ふことである。この時、村田治郎博士は、昨年夏、親しく研究調査して歸りその一部を、觀光東亞、昭和十三年十二月號(即ち第五卷第十二號)に發表した。

この塔は頗る大きく、また高さも二百三十尺ありするところから遠望も利き、山西平原十數里の地點から望見出來ると云ふことで、その大きさのほども大概推察し得られるのである。

この塔は、遼の清寧二年に建立されたこ傳へられるが、確證はないさうである。然し、附近にある清代末期に建てられた碑文、明代に建立された釋迦塔字跋によつて、遼時代建築と云ふここが推定材料となつてゐるのである。九百年後の今日、なほビクこもせぬこの塔は、余程名木匠の抜らしい。

氣候風土の關係で、この地方住民の家屋は低い泥屋根の街であるが、その中に巨大な塔が立つてゐるので、塔に附屬した、いろいろの大きな建築物があるが、皆少く見へる狀態である。塔は六層に見えるが、實に五層であつて、塔内は十階になつてゐて壁畵があり、その雄勁なる筆致には驚嘆するほどである。また四層には巧な工匠の作と見られる、佛像を安置したりしてあつて、佛教盛んなりし遼時代をしのぶことが出來る。

應縣城よりの遠望

（山西省）

應縣城は山西平原にありその遠望は極めて大である。城内にある佛宮寺が、十里を離れた地点から遠望され應縣城の所在を示してゐると云ふ如く、應縣城からもまた十里二十里の遙か彼方の平原が遠望されるのである。

（印書の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯ノ四回の一）

應縣の佛宮寺（一）

（山　西　省）

山西省應縣に在る佛宮寺である、一名釋迦塔とも云つてゐる。塔は遼時代に建築された木造であつて、明治三十五年、伊東忠太博士が踏査發見し、遼時代建築の木造佛宮寺と云つて世に紹介された九百年前の木造建築の存在は珍らしいことになつた一般に知られることになつた九百年前の木造建築で建築工學に關係ある學者の大いに研究に價するもので、昭和十三年には、村田治郎博士が探査研究の歩を進めたほど貴重な古建築物である。

（印畫の複製を禁ず）

應縣の佛宮寺（二）

（山西省）

應縣の佛宮寺（釋迦塔）は應縣城の北西隅にある木造建築の塔である。塔は高さ二百三十尺あり、十里の離れた地点より遙かに遠望出來るほでの高い大きな塔である。塔は外觀屋根が六層あるが實は五層で出來てゐる。然し内部は十層になつてゐて五層には佛像を陳列し飾り立ててある。塔建築年代は遼の清寧二年と云つてゐる。確な記錄はない然し遼代の建築であることは確である。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯ノ四回の三）

應縣の佛宮寺（四）

（山西省）

寫眞は應縣佛宮寺の一階に飾つてある佛像である。大さは約三十尺位い、遼時代以後の出來らしいが鑄造の巧妙さは遖とうなづかれる。壁畵の古味から考へて見ると、これほどの佛塔であるから、建築落成後に後人巨匠が作つたものではないかとも思はれる。塔の古さと佛像の古さとの比が面白くないのは事實である。然し佛像としての出來と崇嚴味は決して缺けてゐない。

（印畵の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯ノ四回の五）

應縣の佛宮寺（五）

（山西省）

應縣の佛宮寺は九百年前の建築だけにあつて、建築學的に、技術上美術上研究すべき點が極めて多い、寫眞は一楷の壁に描かれた壁畫であるが、筆致色彩の優美なることは、今更說明を要しない。

（印書の複製を禁ず）

應縣の佛宮寺（三）

（山　西　省）

この寫眞に示す台は、佛宮寺の塔の一階にあるものである。圖の如く下の台石には花模様があり上の六角の柱には觀音像が細線で刻してあり、その上の台は蓮華を型つてある。もとは石佛像でも飾つてあつたかも知れないが今はその上に鐘を乘せてある鐘は花模様や色合ひから見て新しい物ではないが、古い出來でもないやうである。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯ノ四回の四）

應縣の佛宮寺(六)

(山西省)

應縣の佛宮寺、卽ち釋迦塔の門前に鐵製の巨大な唐獅子が置いてある。明代の製と云つてゐるほどだから、錆が剝げて落ちたところもあるがなかなか善く出來てゐる。

(印書の複製を禁ず)

應縣の佛宮寺(七)

(山西省)

應縣の佛宮寺の裏には更に一つの寺廟がある。その寺の境内には寫眞の如き石塔がある塔の形は萬華の型であるが、塔に刻してある佛像は六朝風であるから余程古いものであらう。

(印書の複製を禁ず)

(亞細亞大觀十五輯ノ四回の九)

應縣の唐獅子

（山西省）

寫眞は應縣城内にある石刻の唐獅子である。何時代の作か、知らないか、頗る巧妙な作である。風化剝落したところもあるから、余程古いものであらう。

（印書の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯ノ四回の八）

應縣の八角の塔

（山西省）

寫眞は應縣の寺にある。八角の石塔である。この石塔は非常に大きく台石には六朝風の調刻がしてある。石刻の技は極めて雄勁で名匠の技と思はれる

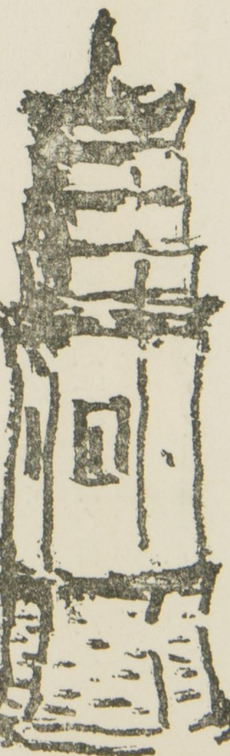
（印書の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯ノ四回の十）

亞細亞大觀

曲阜と泰山

第百七十參回
第十五輯五回



内容

同　文　門……一
萬古長春坊……二
伯魚の墓……三
子恩の墓……四
享　殿……五
至聖林坊……六
遙參亭坊……七
南天門……八
雲步橋……九
泰山棧道……十

記事

曲阜と泰山　森田富義
撮影　島崎役治

大連市山縣通一九三
發行所　亞細亞寫眞大觀社
電話②六二三五
振替大連七一八

版權所有　不許複製

（毎月一回發行）

大連市山縣通一九三
編輯人　青山捨夫
同
發行人　島崎役治
大津市三河町二一
印刷人　鈴木周哉
發行所　亞細亞寫眞大觀社

曲阜と泰山

森田富義

曲阜は孔子發祥の地として知られ、孔子ならびにその後裔に就ての遺跡が頗る多い、そのうち最も雄なるものは聖廟で、それに次いで伯魚、子恩の墓を始め九十餘代の墳墓の地聖林がある、また、聖廟奎文閣の前にある同文門内には、漢、魏、隋、唐等時代に孔子を稱えた碑が保存されてゐるのは有難い。萬古長春坊は、節孝坊、文津橋を經て、聖林に通ずる道路に跨つた石闕五楹の坊で、萬古長春の額が掲げてあるのでこの名がある。

享殿は、各時代の帝王が聖廟に詣でたところで、その南道は拜觀を禁じてある。その他にも孔子に關するいろいろの事物があり曲阜を訪ふ者の目を喜ばせ、心を清らかにして呉れる。

泰山は支那五嶽中の一に數へられ、古來より、「國を泰山の安に置く」とか「山は泰山より大なるはなし、史も亦泰山より古きはなし」と云はれてゐる如し、支那では各帝王と關聯して、政治的に、歴史的に、文學的に名高い山である。僅に五千五百尺の山ではあるが、山東平原に君臨し、支那を統一した歴代の帝王は必ずこの山に登つて天地神明を祀つて國の安泰を祈つたところである。斯く由緒ある山であるために、史を訪ね、或は支那の王侯氣分を味はんとする者の登山者が多く、從つて、それらの人の殘した詩文も相當に多く、それを一つ一つ紹介すれば洛陽の紙數に不足を來すことになるから此處には割愛する。

先づ泰山に登るとすれば、泰安府で汽車を棄てねばならぬ、山麓から山頂まで四十支里と云ふから日本數里の六里二十四町であつて、山路峻嶮、石段の數六千七百餘を攀ぢるのであるからなかなか樂ではない、幸に山麓に轎子（かごかき）があるので、登山者はこの轎子を利用する者が多い、轎子は籐椅子の底に長い棒を通したもので、人夫がそれを擔ぎかけ聲をかけながら石段を登り、峻嶮なところに來ると、轎を下して客に酒代をねだるのは不愉快であるがまた一面に面白い氣もしないではない。

この峻嶮な坂道も六時間ぐらいで頂上に達するがこの轎子も馬廻山嶺以上に登ることは出來ない、こゝからは徒歩で山頂に至り、支那四百餘州を一望に集めて、古來の帝王の氣分を味はい、思ふに耽けることが出來る。頂上にある無字碑の苔は幾千年を經たものか、十五年前に泰山に登つた支那古文學の研究家田中貢太郎は「秦か漢か無字碑に苔の青みたる」の一句を詠んでその雄遠さを偲んでゐる。

泰山の名所は、山麓の岱廟から美事な牌樓の岱宗坊があり支那獨特の建築として知られてゐる。登れば秦柏の林があり一天門があり此處に玉皇閣を始め道教の寺院がある。そしてまた「孔子登臨處」と銘刻した建築があり、母斗宮までは民家もある。母斗宮は尼寺で泰山の中腹にあつて、寺廟が多く清流もありして景勝の地で徒歩登山の文人墨客はこゝに一泊するを常とする。その他古來二千年の古碑を殘す摩崖があり、高老橋があり、「漸入佳境」の額壁もある石經峽には、花崗岩に六朝風の文字で金剛經が刻してある。

以上の如く泰山は歴史的に思考し觀るべきものが非常に多く、それらを見る者は徒歩登山を良しとし、山頂を極めんとする者は轎子を利用すれば良い、轎子は登り六時間餘を費したところも三時間ぐらいで下山することが出來る。まあ、山東の治安が確立したら、一度は登山してもいゝところである。

同文門

（山東省）

山東省曲阜孔子廟即ち至聖廟奎文閣の前にある門が同文門である。門の内には漢魏隋唐等諸時代の碑が保存されてゐる。その最も著なるものは魯孝王刻名（五鳳二年魯三十四年成）祝其鄉墳壇刻名（篆書店攝二年造）上谷府鄉壇刻名（篆書店攝二年造）魯相乙瑛置孔廟百石卒史碑（八分書永興元年六月）漢謁孔子廟碑（隸書立碑年月無刻）その他魏後齊隋唐宋に渉つて四十五の碑がある。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯五回ノ一）

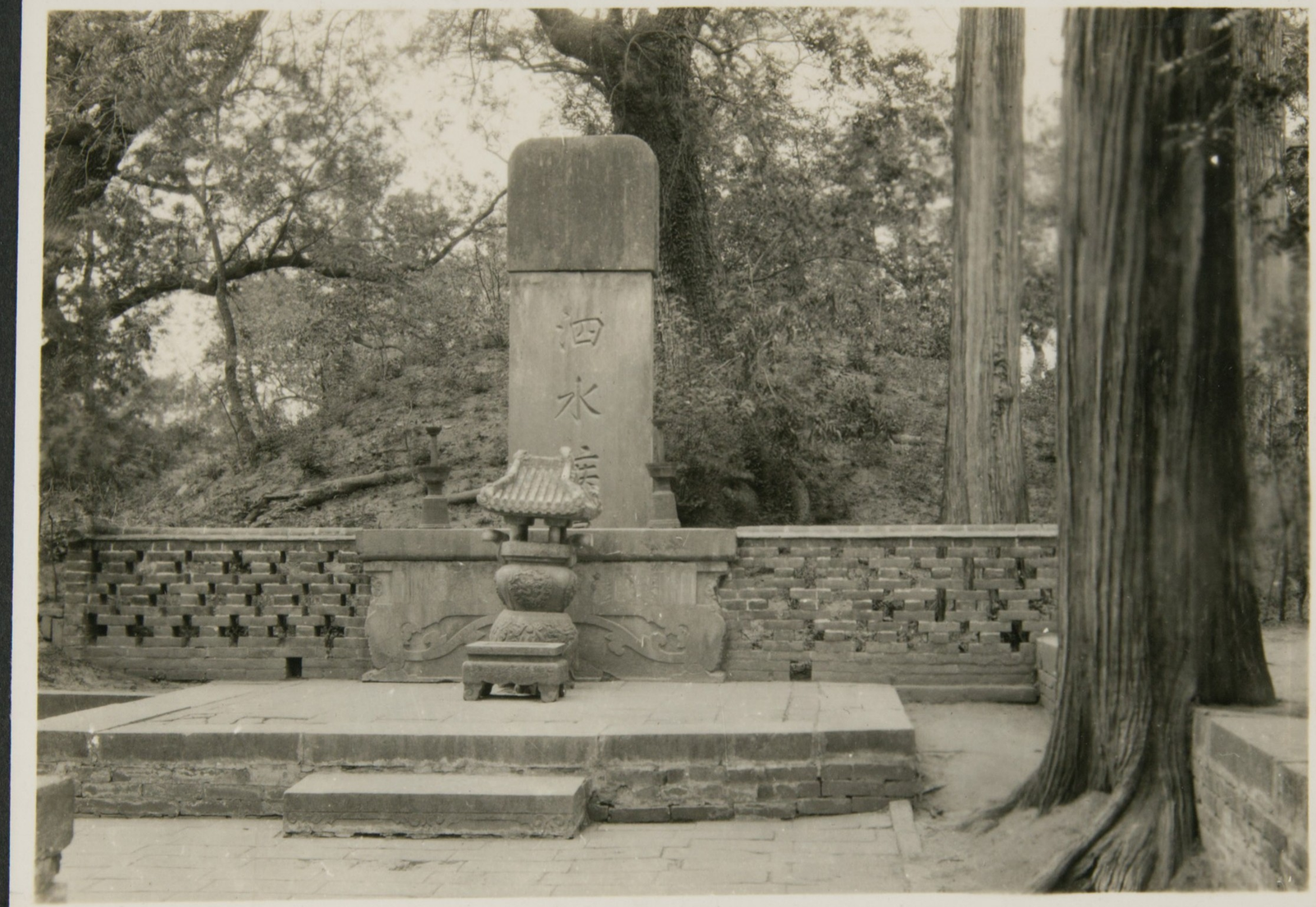
萬古長春坊

（山東省）

曲阜城北門から更に北に進み節孝坊を經て文津橋と云ふ石橋を渡つて至聖林に通ずる寬濶の道路がある、これが即ち神道で、路の兩旁に松柏檜杉の列が對立しその直なること矢の如くである。ところが、この神道に傍つて石隅五楹の坊があり、額に萬古長春と題してある、爲めに後人この坊を萬古長春坊と云つたものである。明の萬曆二十二年に建立したものである。また左右に牌樓があり、左に至聖先師神道碑、右に重修碑が林立してゐる。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯五回ノ二）

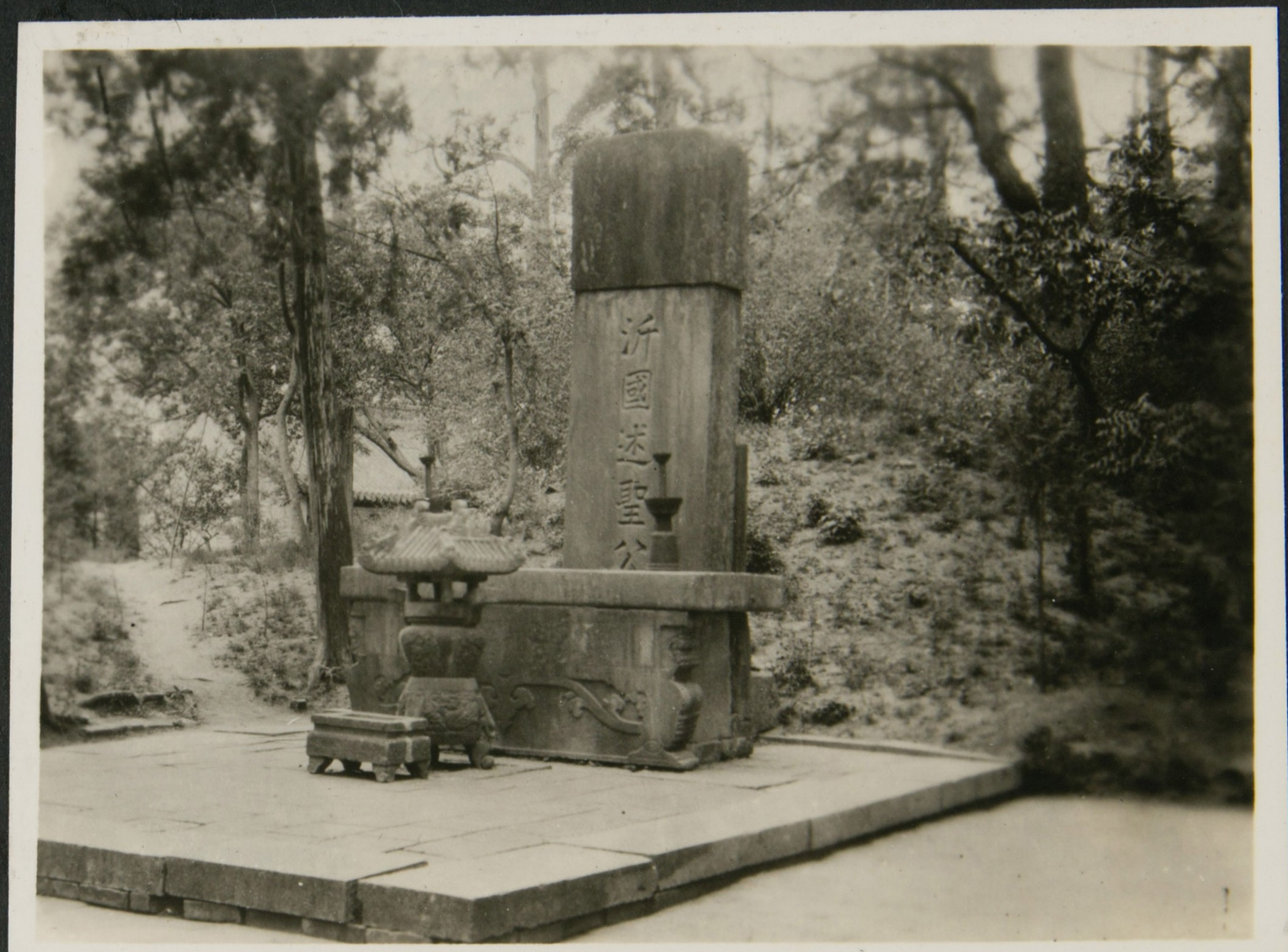


伯魚の墓

（山東省）

孔鯉は孔子の子で伯魚はその字である。生れる時、魯昭公が孔子に鯉を賜つたので、大に光榮とし鯉をもつて子に名付けたのであ る。父孔子に教を受けてゐたが齢五十にして先つて沒した。墓は父孔子の墓より東南 公に寄り數歩のところにある。前宗の孔碑には明の英宗帝正統八年に聖裔五十代衍聖帝に孔彦繡（一字は朝紳）の重立せしもので、墓崇に泗水侯墓としてある。この諡號は宋の徽寧元年に贈られたものである。

（印畫の複製を禁ず）



子思の墓

（山東省）

子思は字、名を孔伋と云ひ孔子の孫である曾子に學び訓を受け、獨り孔門の心法を傳へ、中庸を作り、以て父師の意を著はしたのである。墓は孔子の墓より南十歩ばかりのところにある。宋の徽宗帝崇寧元年に沂水候、元の文宗帝至順元年に沂國述聖公と改められ、明の嘉靖に封爵を罷めて、ただ述聖と稱することとなつた。墓碑は明の孔彦繩によつて重立せられ、英宗帝正統八年に沂國述聖公の字が鐫られてある。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯五回ノ四）

享殿

（山東省）

享殿五間は、後漢永壽元年に魯相韓勅（字は叔節）が建立したものである。（亭殿の左右より周垣があり、一支里（六丁）北に進んで聖孔子の墓の後に至つてゐる。周垣は孔子伯魚、子恩、四世孔白、七世孔穿の墓を圍んで居る。殿の南は通道（天子行幸の路ゆえに墻を設けて通行拜觀を禁じてある）である。中に、石鼎一、翁仲二、文豹二、角端二、華表（望表）二があつてゐる。寫眞の檜の間に見ゆる石獸は角端（四裔の語を曉る靈獸）その前に見ゆる柱である。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯五回ノ五）

至聖林坊

（山東省）

至聖林は曲阜縣城北二支里（十二丁）のところにある。孔子以後聖裔歷代の憤墓のところである。東漢永壽二年に相韓勅が孔子の墓を修めてより歷代擴張して、清の康熙年間になるとその廣大なること縣城よりも廣く、二十九頃四十畝、約我が五十三萬坪ありこれに牆垣を周らしてある。至聖林廟は即ちその入口で、坊の左右は前林村と呼ばれてゐる。史記に『弟子及び魯に行きて家に從ひて家す、因つて孔里と曰ふ』とあるが百有餘室、因つて孔里とはこの至聖林坊のことである。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯五回ノ六）

遙參亭坊

（山東省）

遙參亭は岱廟正陽門外にある。廟に事へる者は先づここで遙拜して後ち門を潜る。因つて遙參亭と云ふのである。亭の前に石坊があり額に遙參亭の三字が題してある。そしてまた、飛龍、唐獅子の陽刻を施してあつて泰山坊門の中で一番美しいものである。坊の北殿があるが、ここには碧霞元君を祀つてある。この遙參亭は即ち岱廟の玄關口と云ふ格である。

（印書の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯五回ノ七）

南天門

（山東省）

宋の大中祥符元年十月、眞宗帝は天書を奉じて封禪の大儀を擧げてこの邊に一宿した。すると夢中に三人の神靈顯はれ『余等は周の帝の仁政を祝する爲めに來れり』と諫官なりと告げた。帝の眞宗帝夢より覺めて夢中のことを、寵臣王欽若に問ふて、周の流寓唐宸、周武、葛雍の三忠臣なることを知り、廟を建てて祀つた今徠山の頂に廟はないか、山麓徠山廟内に三靈候相があるといふ。これが即ち周の諫官を祀つたものである。寫眞はその南天門で、この門をくぐれば四五の茶店があつて、徠山登山者の請を潤ほして吳れる。

（印書の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯五回ノ八）

雲步橋

（山東省）

雲橋は雪花橋と云ひ、楡木橋とも云つて泰山に於ける景勝の雄なるものである。橋は木造丹塗であつて峻劍なる巖より落つる飛瀑の上に架せられて、丹橋の丹色と雪花と碎け散る水滴の輝きは相映じ相輝きして、登山人を驚かし喜ばしてゐる。橋の右側にあるたそこの東北には、宋の宣宗大中祥符年間に登封禪の駐蹕せられたところと傳へられ、御碑が今も尚ほ、柱を立てた礎の跡が殘つてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

泰山の棧道

（山東省）

泰山は世界に珍らしい。全然花崗石の峨々たる石山で山麓の登り道以上は老木はなく對松嶺附近に僅に松樹を見るのみだ、山麓から頂上まで約五マイルであるが、急峻、喰山である。普通の登山とは趣が違ふ。登山には轎子と呼ぶ籠擔人夫がり藤椅子に乘つて蟹の横這の如く一段と掛聲をかけながら登つて行く。寫眞は棧道の一場面で全部石を疊んである。

（印書の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯五回ノ十）

大同善化寺の点描

第百七十四回
第十五輯六回

内容

大同善化寺……一
大同善化寺第一殿……二
大同善化寺第二殿……三
大同善化寺第三殿……四
大同善化寺樓閣……五
大同善化寺の石紋……六
大同善化寺の閻魔王……七
大同善化寺の佛像……八
大同善化寺の仁王……九
大同善化寺の石……十

記事

古建築探寫行　島崎役治

撮影　島崎役治

大連市山縣通り一九三
亞細亞寫眞大觀社
電話②六二三五
振替大連七一八

版權所有　不許復製

（毎月一回發行）

編輯人　大連市山縣通一九三　青山拾夫
發行人　大連市三河町二一　島村役治
印刷人　同　鈴木周哉
發行所　亞細亞寫眞大觀社

古建築探寫行

島崎役治

私は昨年九月、京都帝國大學教授村田治郎博士が支那の山西、蒙疆地方にある古建築物調査に赴かれた時、寫眞班として隨伴した。山西行脚は私に取ては三度目であるが、蒙疆地方は始めてで珍らしい發見があつたり、學術上、歷史上その他の文化史上に貴重なものが非常に多かつた。古建築上としては、厚和の萬部華嚴經塔、應縣の佛宮寺木塔があつた。前者はポヅドニエーフの『蒙古と蒙古人』と云ふ旅行記によつて世に紹介され、後者は明治三十五年に我が伊藤忠太博士が遼代の木造建築として、支那最古のものであると云つて發見報告されたので世界的に有名になつたのである。

私は學者でないから、建築上の時代の樣式とか、その構造等に就いては更らに知らないし、專門外であるから深い研究もしなかつたが、珍らしい建築物として村田博士の依賴によつて寫眞機に藏めて歸つたものであつた。

大同でも、城西門、華嚴寺、その他に、八百年以上を經た建築物もあり、何れも寫眞が出來てゐたが、善化寺は今度はじめて往つたところである。位置は大同府の東門にあつて、寺は四圍屏を圍らして、周圍の畑と境堺を明にしてあつた。應縣の佛宮寺木塔や、厚和の萬部華嚴經塔から見れば稍々新しいものらしく、私の見た特徵としては、土屏の左側の二層樓門を除いては、皆平家建であつて、大して古いとも思へなかつたが、第一殿入口の石紋と、第三殿前庭の四段重の石を見た時、寺歷としては相當に古いものであるやうな氣がした。殿內の佛像も時代めいたものが多く、殿內の壁天井等の裝飾は確に最近のものでなく、精致巧妙で色彩も古色蒼然たるものであつたやうな氣がした。それに依つて考へると、やはり大同の佛教文化の華かなりしころの遺物で名僧の發起で、名匠が建立したものだらうと思つた。この附近を中心として、古い支那の政治と學門と宗教經濟交通等の發達は著しいもので、調査する程面白い價値あるものが發見され、研究さればする程、考古時代の事跡が明らかになつて來て、世の中に貢獻することが大きいことであらうと思つた。この旅で、私はその他に、珍らしい建築物、佛像考古學參考學 或は歷史上有名な譚りの事跡を探して歸つたが、重復するところがあつたり、價値の有無の判斷に苦しむものがあつたりするので、割愛して讀者の迷惑を避けることにする。

大同善化寺

（蒙疆）

大同は雲崗の石佛を以て古文化の繁華を知られてゐるが、城内にはまた善化寺の如き擴大な寺院もあつて、如何に昔の大同が佛教文化に富んでゐたかが伺はれる。寺は大同城の東門にあり、城西門や華嚴寺とともに古き建築として知られてゐる。

（禁印畫複製）

（亞細亞大觀十五輯六回一）

大同善化寺第一殿

（蒙　疆）

寫眞は善華寺の第一殿である。門を潛つて進めば石段があり次に石刻の狗が左右に一對ある扉を排して中に這れば闇魔大主の如き像が柵を圍んで安置してある。外廊は見る如く壁が落ち屋根瓦は燕雀の巢となつてゐるが、擔の木彫刻の精細巧妙さは古建築としての滋味を充分に備へて佛教盛んなりし比の繁榮を偲ばせて吳れるが、今は參詣人の影もないのが淋しい。

（禁印畫複製）

（亞細亞大觀十五輯六回二）

大同善化寺第二殿

（蒙　彊）

善化寺第二殿の入口には對聯が掲り、扉の上には珍らしくも南無阿彌陀佛の文字が書かれてある。殿内は第一殿第二殿の如く内部の裝飾は精致巧妙で絢爛を極め、その中に澤山の佛像が安置してある。建物の裏に擔の低い家が見えるがそれは僧房である。

（禁印轉複製）

（亞細亞大觀十五輯六回三）

大同善化寺第三殿

（蒙　彊）

善化寺第二殿は第三殿より稍々大きく境内に鐘樓その他の小建築があつて復雜である。殿内には閻魔大王の侍臣と思はれる刑吏の役人らしい像が立ちならんでゐる。そしてその奥には絢爛目もあざむく程の佛像が安置され天井の彫刻もまた頗る巧妙で、そのきらびやかさには驚くほどである。

（禁印書複製）

（亞細亞大觀十五輯六回四）

大同善化寺樓閣

（蒙　疆）

善化寺の樓門は寺の左側周壁の、第二殿と第三殿との中間ごろのところにある。本殿よりは小さい建築であるが、二層樓で、建築の優美さは他の建築よりはるかに佳く出來てゐる惜しいことには壁が落ちて昔の美を損ふてゐるところが多い、寫眞に煉瓦の山を見るが、何處か破損個所の修繕でもするのであらう。

（禁印書復製）

（亞細亞大觀十五輯六回五）

大同善化寺の石紋

（蒙　疆）

寫眞は善化寺第一殿入口にある石刻の紋である。何時の時代の作か知らないが、巧妙な石刻で、簡單なものではあるが名匠の作に違ひない。

（禁印書復製）

（亞細亞人觀十五輯六回六）

大同善化寺の閻魔王

（蒙　疆）

善化寺第一殿の扉を排して這入れば第一門の兩脇に寫眞の如き閻魔大王が棚の中に坐してゐる。出來は古いものでないらしくあくどい色彩の紛飾には支那人の好みの濃厚さを物語つてゐる。一覽、有難さも感じなければ、威嚴も感じない、殘るところは嫌らしさだけである。

（禁印書復製）

大同善化寺の佛像

（蒙　疆）

善化寺に安置してある佛像で一番優れてゐるのは第二殿の佛像である。絢爛目をあざむく殿内の装飾の中に、阿彌陀如來、釋迦、觀音等の佛像が金色燦然と構え一座してゐるところはなかなか賑やかである。天井の精致を極めた彫刻は往時の美術を偲び不細工な支那人の中にも斯る細密で巧妙な作を好む名匠がゐたものかと驚かされる位いである。

（禁印書復製）

（亞細亞大觀十五輯六回八）

大同善化寺の仁王

（蒙　疆）

寺の山門には何處にも、鬼な裁く閻魔様の像があり、その下には必ず仁王様が赤鬼青鬼の屬吏を從えて構えてゐる。善化寺にもそれがあるが、此處では山門でなしに第二殿内に安置してある。閻魔大王は新しく俗惡であるが、仁王様は相當の時代ものらしく、作もまた力がこもつてゐて、閻魔の廳の獄吏に相應しいものである。

（禁印書復製）

（亞細亞大觀十五輯六回九）

大同善化寺の石

（蒙疆）

善化寺第三殿の前庭に寫眞の如き四段重ねの石がある。何に使用したか不明であるが、石の古びたところから見れば相當の年代を經過したもので、蓮の彫刻の模様なり風から見れば六朝前後の作と思はれる。切角の銘石も出來た年代か不明であり、用途か不明であるのは殘念である。

（禁印書復製）

（亞細亞大觀十五輯六回十）

滿洲圖大觀

山東嶗山岌博山附近

第百七十五回
第十五輯七回

內容

嶗山の望海……一
嶗山九水の景……二
嶗山の山頂……三
青石關……四
濟南の水田……五
青石關の雪……六
博山の石炭市街……七
博山製陶業……八
博山附近の石人像……九
博山特殊街……十

記事

山東嶗山の景勝　森田富義

撮影　島崎役治

大連市山縣通り一九三
發行所　亞細亞寫眞大觀社
（每月一回發行）

版權所有　不許復製

大連市山縣通一九三
電話②六二三五
振替大連七一八
編輯人　青山捨夫
發行人　島崎役治
大連市三河町二一
印刷人　鈴木周哉
發行所　亞細亞寫眞大觀社

山東嶗山の景勝

森田富義

嶗山は膠州灣租借地東方境界と北方境界の一部に誇る山である。津浦鐵道沿線の泰山と共に山東名山の雙璧として有名である。山は山岳重疊全山花崗岩を以て覆はれ奇岩奇勝簇出し、神斧鬼鑿の妙味を味ふことが出來る。連山の名勝舊跡殊に多く、特に九水は猪窩河畔、旱河の上流にあつて嶗山全景中第一の景觀である。溪水滾々と湧き莊むところ亭々とした老樹あり、その下の溪流を遡れば有名なる彈月橋があり、その山麓には九水庵がある。山頂の仙境には別道を辿るが猪窩河岸と對時して柳樹台まで續く絶景は實に行人の眼を奪ふ有樣である。

柳樹台は、嶗山連峯中の雄で、眺望佳くまた一番登山に樂な山である。そのためか獨逸人が、此の山に漫遊客と病人の爲めに莫大なる費用をもつて『メクレンブルヒ』保養院を建設したが、大正三年の役に兵火に罹り現在はその殘骸があるのみである。が然し山頂には登山者の便利のために日本人と支那人經營の茶店があつて、果物を賣り茶を呑まして呉れる。この絶景を眺めて東北に向つて山を下れば暫くして白沙河の上流北九水である。この白沙河に架けた橋を渡れば、北九水廟と云ふ寺廟がある。廟は擴大ではないが、下を流れる流れは白銀の如く白沙河の清流と相映つて、清々とした氣がする。更に白沙河に添ふて東南に行けば河東峠と希望峠があり河の下流には、大嶗山觀、水清宮瀑布等がある。

山頂は嶗山連峯中の主峯であつて頂上には疊半疊位いの平面石があるが、寺廟の跡は發見されてない、大清宮は嶗山系の東南隅にある山麓の大清灣に面してゐる、白雲洞は嶗山の東北隅にあり山中に寺廟が多い、然しここの寺廟は人工的美なく何れも天然の巨木、巨岩の自然の堂宇であつて參詣人はその神技の美に襟を正す位いである。

この嶗山の絶景を探勝するには、青島より自動車を利用すれば一日の行程でその景勝の一部は觀賞することが出來るが、眞に嶗山の景を極めんとすれば徒歩登山であつて、若し登山せんとする者は、寢具と食料を携行し案内人を必要とするのである。だが、それは余程の閑人の仕事であつて、只だ嶗山の景を極めんとするならば青島より自動車便に依つて一日の觀光を以つて事は足りるから、若し山東の地方を旅行し、青島に遊ぶ者は一日の清遊を試み俗氣を洗ふことも必要ではあるまいか。

嶗山の望海

（山東省）

奇岩奇峯、翠巒重疊たる嶗山の山頂に立つて遠く海を望むも亦一景である。足下は花崗岩の聖層、目を遙かに遠くすれば連峯を越へてやわらかき、雲煙の彼方に遠く海を見るこの絶景先年獨逸人がこの地を別莊地とし、遊覽地としたるも故なきことではない。

（印書の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯七回一）

嶗山九水の景

（山東省）

九水は猪窩河畔、旱河の上流にあつて、嶗山第一の奇勝地である。寫眞は先年獨逸人經營の休息所であつて、後日本人經營となり現在は支那人が經營してゐる。この附近に九水庵の古刹があり、九水仙境もこの附近にある。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯七回二）

嶗山の山頂

（山東省）

泰山と併稱された山東省の名山は嶗山である。この山の極致を知るには約十日を費し、夫々の寢食の準備と案内人を要するが、自動車を利用すれば青島より一日の行程である。全山花崗岩で、樹林はないが、清澄の流水、翠巒重疊として連なり、山頂は神斧鬼鑿の妙景、脚下に雲を踏むの氣、實に快絶の聲を放たざるを得ず、更に古刹寺廟多く登山者の興趣は盡きないところである。

（印書の寫製を禁ず）

青石關

（山東省）

青石關は齊魯の境界をなす萬里の長城のある關所である。朽ち果て、苔蒸した城壁は齊魯の昔しを語る古いもので、その中間の關門は、昔し役人がゐて、國境を通過する行人を一人一人誰何して手形の提示を要求したもので、青石關もその關門の一つである。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀五輯十七回四）

齊南の水田

（山東省）

山東省には水田がない。然し齊南の近郊には珍らしくも水田があり、夏は青田が繁り、秋は水稻が實る。寫眞は、秋の收獲を終り冬に入つた水田の景である。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯七回五）

青石關の雪

（山東省）

雪は滿洲ばかりではない、山東省齊魯の地にも雪が降り、白皚々と積る、寫眞は、青石關附近村落の雪景であるが、春夏は石ころの地肌であるが、冬が來り、雪化粧すると實に美しい色となり、その靜かな邑の道を一輪車がぎいぎいと一種異樣な哀音を流して通るのが寂しさを一入募るやうである。

（印畫の複製を禁ず）

博山の石炭街

（山東省）

山東鐵道博山支線の終点で張店より約二十哩の地点にある。街は山間の縣城で、人口三萬に過ぎないが、この地一帯石炭の埋藏量多く、博山炭礦として先年獨逸人が經營、一年三十万吨を採掘してゐたが、後ち日本人の經營となり、現在は相當量の石炭を採掘し博山炭の名を以つて淄川炭と共に有名である。

（印畵の複製を禁ず）

博山の製陶業

（山東省）

博山附近は昔から陶器製造の發達したところとして知られてゐる。寫眞は素燒製陶場の一部であるが、この附近一帯何處にも素燒陶器が山と積まれてゐる。また博山はその昔しより、硝子製造の發達したところで、硝子の産地としても有名である。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯七回八）

博山附近石人像

（山東省）

博山は山東省の山間にある小縣城に過ぎないが、昔しより文化の發達したところでの史蹟も亦頗る多い、寫眞は文化の發達した時代を物語る石碑や石人像が、畑の中に埋もれたところで、齊魯の遺物として史家の研究資料として珍重されてゐる。尚石像が永い年代に土沙の爲めに沒し僅に首部の露出してゐるのも面白い現象の一つである。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯七回九）

博山の特殊街

（山東省）

博山に孝婦川と云ふ川が流れてゐて、その兩岸に勞働者街がある。一口に勞働者街と云へば、何も味はないが、この街を覗て見ると特殊街として一驚に價する。この街には娼婦があり、娼家がありして安價勞働者の慾を充す、飲食店　藥商　質屋　その他諸々の娯樂場とも備へた珍らしい街である。何れも勞働者の一日の低廉な賃金を以つてして、總てを充し滿足し得るところで、ここを孝婦川の工夫市と云ふのである。

（印書の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十五輯七回十）

大同古代建築の古描

第百七十六回
第十五輯八回

内容

大同東門の櫓……一
下華碑寺の木彫……二
華大寺の壁畫……三
下華嚴寺の香爐……四
華嚴寺內部の木彫……五
善化寺の櫓……六
善化寺の梁……七
善化寺の碑文……八
下華嚴寺……九
下華嚴寺の佛像……十

記事

大同の文化を研めよ　森田富義

撮影　島崎役治

（毎月一回發行）　版權所有　不許復製

大連市山縣通り一九三
發行所　亞細亞寫眞大觀社
電話②六二三五
振替大連七一八

大連市山縣通一九三
編輯人　青山捨夫
同
發行人　島崎役治
大連市三河町二一
印刷人　鈴木周哉
發行所　亞細亞寫眞大觀社

大同の文化を究めよ

森田富義

支那事變に、皇軍が、山西省に兵を進めて以來蒙疆の地は一躍有名となり、大同の石佛も亦頗る有名になつて來た故に大同を語る者は雲崗の石佛を談じ珍奇とし、石佛を談ずる者は大同のよさを語る、だがそれらの人は何れも、雲崗の石佛は見るが、大同城を見てゐない感がある。大同城附近に雲崗があり、雲崗に石佛があると知るならば、その石佛の存する所以を究めてこそ、始めて大同石佛の眞價が判り、大同がその昔、如何なる地であつたかを知ることが出來るであらう。二三の考古學者や建築學者、のみが知つて置くべきでなく出來ることなら、大同にある人全体が知り、大同を訪ふ總ての人が知つてゐてもよいところである。一時的の金儲け根生や收入が多いから僻地の生活も暫く辛棒するのでは、切角の地も實質的には開拓されないと思ふ。だから、支那に職を求の、支那に生活の根據を置く者は先づ、その支那を知らねばならぬ、三千年の興亡史を總て詳細に知つて中學校の東洋史の先生になるには及ばないが、先づ、その土地の風習を知り、地理を知り、歷史を知ることは、その土地を文化的に開發し、住民を文化的に導く上に於ても非常に必要なことだと思ふ。さればこそ、大同に就て、再參、その史實を繙く以所でれる。

昔し大同は北魏の首都であり、政治の中心として、學術、技藝の發達したところであつた。從つて學術と云へば佛教を聯想し、佛教と云へば學問と思ふてゐた時代では、何をおいても、佛教に關した學術技藝の發達したことはいなめないことである。だから、文成帝の興安二年に曇曜が、帝に進めて自ら雲崗に石佛を開鑿したと聞くが、大同城の佛教文化はそれ以前と見ても差支へあるまい。昔し大同には同舛、靈光、鎭圖、護國、崇福、童子、能仁、華嚴、天宮、兜率の十寺があつたと云ふことである。今その寺の所在の云々に就ては知ることも出來ないが、現有する古寺としては上華嚴寺下華嚴寺、善化寺等があるが、その開基年代等は雲崗の石佛開鑿前後と見ても大した間違はなからうと思ふ。先づ、それら殘存せる古刹の建築樣式から、內部の裝飾、安置せる佛像、壁畵等より見ると、北魏時代の風を偲ぶものが殘つてゐる。北魏齋魯を物語る六朝佛、六朝文字の碑文、一千年前を物語る路傍の唐獅子等、語る人は殘つてゐないが、歷としてその時代の技術なり藝術品が殘存してゐるのである。で大同に住む者は、これらを觀賞的とせず學術的に研究するか、口碑傳說的に保存するかして、その土地の史實を知る必要があるだらうと思ふのである。幸に皇軍占據以來藝術品の散逸を防ぐことに努力して、東洋の古代文化保存に任じてゐて呉れることは實に感謝の極みである であるから、吾人は、勉めて大同文化を知ることに努力し支那人の性情を知る具にしたいものである。

大同東門の櫓

（大同）

大同が千年前の支那北魏の都であつたことは、史家や、建築研究家や、考古學者に依つて評論に說明され、本社に於ても屢々寫眞を以つて說明したところである。

寫眞はその古都の城壁に殘された東門の櫓であるが、これは明時代の建築であつて、北魏齊魯時代の文化とともに時代の繁榮を知ることが出來るのである。朽ち果て荒廢したこの建物が時代文化の發達を證明することを考へると、如何にしても原型保存の必要を感ずるであらう。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀）

下華嚴寺の木彫

（大　同）

寫眞は大同下華嚴寺の木彫佛像である。佛像は寺院の内部の壁に刻み込まれたもので、何れも名匠か名僧が刻んだものであらう。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀）

華大寺の壁畵

（大　同）

大同華嚴寺の古建築と、佛像と、壁畵は有名なものであるが、わけて寫眞に示す壁の佛畵は實に立派なものである。而してまた、天井四隅の組立方の巧妙なことは近代建築術の遠く考へも及ばないほど巧致に出來てゐて、この組立方を見た建築家は何れも讃嘆してゐると云ふことである。

（印畵の複製を禁ず）

（亞細亞大觀）

下華嚴寺の香爐

（大同）

寫眞は大同下華嚴寺の境内に置かれてある鐵の香爐である。一見する如く、香爐として は少し大き過ぎ小鐵塔とも見られるが實際は香爐である。何時、誰れの作かは別らないが鐵器時代の物であるから相當に古いものであらう、直ぐ後にある小塔の佛像も古いものらしい。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀）

華嚴寺内部の木彫

（大　同）

大同の華嚴寺は古刹として有名であるが、その建築と寺内の彫刻も、亦古文化を知るには考古の參考物的のものである。寫眞では判然せぬところがあるが、實際に見る時は實に驚嘆に價ひする程の美術的技術が殘されてゐるのである。一刀一刻、名匠の刀の跡が匿然殘つてゐるのを見れば懷しい氣が起る。

（印刷の複製を禁ず）

（亞細亞大觀）

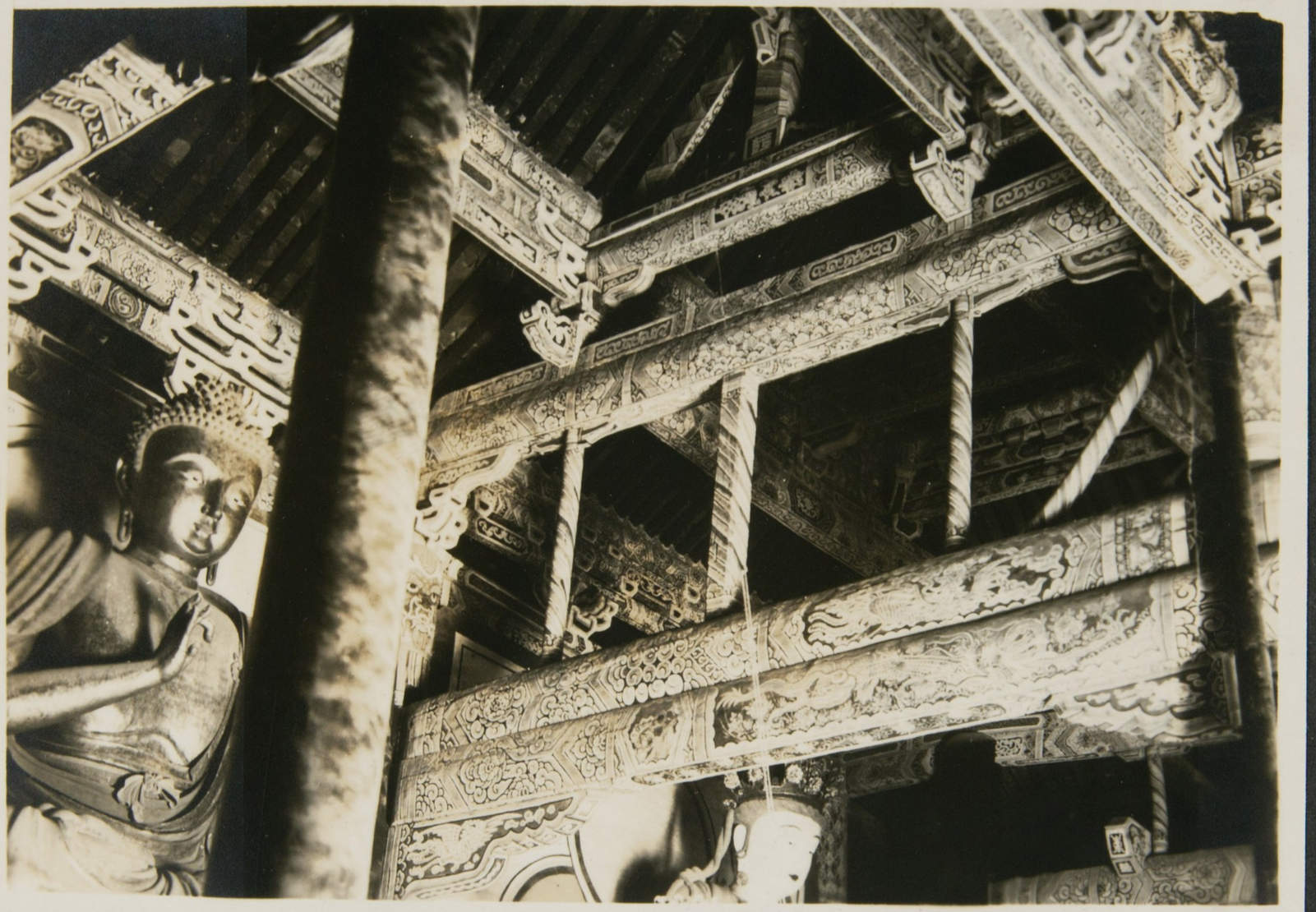
善化寺の檐

（大　同）

善化寺が如何に古刹で、善美を盡した建築であることは、この寫眞を一見すれば判然とするであらう。寫眞は寺内の梁の組立の精巧さと、梁木に刻まれ彩色された模様を示すものであるが、その善美と結構にはどれほどの經費がかかつてゐるが相像出來ない、この立派な寺院に安置された佛像も亦得難い逸品ばかりである。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀）



善化寺の梁

（大同）

大同善化寺が古い古刹であることは云ふまでもないが、この寺の櫓の組立も亦東門の櫓と同じく古いものである。遅拙な説明を書くよりも、この寫眞を一見すれば、その建築上の粋が何へるだらう。

（印書の複製を禁ず）

（亞細亞大觀）

善化寺の嚴文

（大　同）

大同善化寺は古刹であるだけい古い由緒あるものが相當にある。寫眞は善化寺第一殿内に藏されてゐる碑文の一つであるが、書體から見て遼金時代の碑文に見たは誤りであらうか、

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀）

下華嚴寺

（大同）

寛眞は大同下善化寺の前面の一部である。古刹らしい錆のする寺院であつて、前面に掲げられた『簿伽教藏』『古刹重新』『慈恩普濟』等の遍額はそれぞれの由緒を物語つてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀）

下華嚴寺の佛像

（大　同）

大同にある古刹には得難い佛像が安置してある。これは下善化寺内の佛像であるが、佛教文化、即ち宗教藝術の所産として名僧が名匠の手になつた佛像であるが、その宗教藝術の精粋は、大同に訪て始めて知ることが出來る程發達したものである。その發達が千年の昔と思へば更に驚かざるを得ないのである。

（印書の複製を禁ず）

（亞細亞大觀）

北京の沿革

第百七十七回
第十五輯九回

内容

太廟の門……一
大廟の第一殿……二
太廟の飾石……三
大廟の皇帝椅子……四
大廟の石段……五
資福禪寺(一)……六
資福禪寺(二)……七
傳塔雙頭寺……八
護國寺(一)……九
護國寺(二)……十

記事

北京の沿革……森田富義

撮影

大連市山縣通り一九三……島崎役治

（毎月一回發行）

發行所　亞細亞寫眞大觀社
電話②六二三五
振替大連七一一八

大連市山縣通一九三
編輯人　青山捨夫
同
發行人　島崎役治
大連市三河町二一
印刷人　鈴木周哉
發行所　亞細亞寫眞大觀社

版權所有　不許復製

北京の沿革

森田宮義

北京は支那歴代が都として以來頗る重要視されたところである。地形は砥の如くあり、形勝は爽塏を帶びたところで、幽燕の地で、虎が踞り、龍がはびこつた如く左には滄海があり、右に大行小脈、北に店庸を枕し、南は河に沿ふて齊南に至つて、實にその形勝地形は天下に勝れ、天子の都として勝れたところである。今その歴史を究めて見ると、唐虞の時代には幽都と名け、或は幽州、燕城とも云つて、その名は定まつてゐなかつた。夏殷の時代には更に幽州と呼び冀州と稱したが堯が封ぜられるに及んで燕と呼んだのもこの地であつた。秦時代には上谷郡、厥から漢時代には廣陽郡と名げ、晉には范陽郡となり、後ち建都して南京と改稱し別名を燕京と呼び、これが即ち京と呼ぶやうになつた始めである。だが、開泰の初年に析津府と改め、薊北縣析津縣幽都府宛平縣と唱えた、隋の開皇三年には郡を廢して州と爲し、總官府と稱した。即ち、唐の初め幽州、宋には燕山府、正元四年、金の國主は臣を率ひて燕に幸し、遂に幽州を以つて中都となし、名を大興國と定めたので、析津縣は大興縣に改められた、然るに、元の初に北平と呼び燕市と呼びして、後ち大興府となり、大都と改められ、大都路總官府が併置された。而して明初に大都路は北平府となり、京都となり、北平と改められ北京と呼ばれるやうになつた。北平府となり、北平と稱され以來その儘であつたが、清が入關して、名を北京と呼んだが、中華民國が肇興して、州府を廢して、順天府を改めて京となし直轄二十四縣に及んだが、民國十七年六月國都を南遷してからまた改めて北平と呼び、北京内外城及四都を特別市と定め、十九年にまた北平直轄市となり南京國民政府行政院の直屬地となつたが、支那事變により、日本の占領地區となつたので、またが北京と改稱されたのである。

以上は北京沿革の概要であつて、如何にこの地が地理的に、景勝の地であり、王者の都した、政治の中心であり、また交通の要衝であり、支那文化史の中心であつたかを知るに足るであらう。依つて支那を知り、北京を知るには、何を置いても、北京の沿革を究め然る後、諸種の歴史を伺ふべきであらう、而して漸く、北京の政治史、文化史が判然して、そこに興亡違なき支那の國情を知るであらう

太廟の大門

（北京）

太廟は北京天安門前の東から北に向つてある。廟は明の永樂十八年に建立されたもので歷朝歷代の列聖や功臣を祠つたところである毎年四季と歲暮には太廟の大祭が執行される寫眞はその太廟の城壁に以た高扉の一部にある門の全景である。一瞥その廣大を伺ふに足るであらう。

（亞細亞大觀第十五輯九回一）

太廟第一殿

（北京）

太廟の大門を潜つて中庭に這入れば、直ちに眼前に擴大な太廟第一殿建物が身に迫る。多分拜殿と云ふべきところであらう、何時の重修か知らないが、屋根瓦の上には夏草が茂り、『□□大廟』の勅額も古びて錆が出てゐる。廟を訪れた者は、此處で既に奴肝を拔かれた形である。

（亞細亞大觀第十五輯九回二）

太廟の飾石

（北京）

太廟の祭典が歴朝皇帝の親祭であつただけに、太廟の構へは實に擴大で、また總てに善美を盡してゐることは今更云ふまでもない、この寫眞は、總て大理石で作られた廟内の飾石である。筆者は、もうこれ以上に說明する力を有たぬほど、構へか大きく、また善美を盡したものである。

（亞細亞大觀第十五輯九回三）

太廟皇帝の椅子

（北　京）

太廟の祭神か列聖と功臣であるだけに、その祭祠は支那歴朝の皇帝が親しく行はれたものである。で寫眞は、神典の際、皇帝が用ひた椅子と、その祭典に用ひた道具である。今は太廟の祭典を執行する皇帝もなく、それらの器物は寶物殿に藏められて、一般の參觀に供せられ、參觀者は徒らに往時の盛儀を偲ぶだけである。

太廟の石段

（北　京）

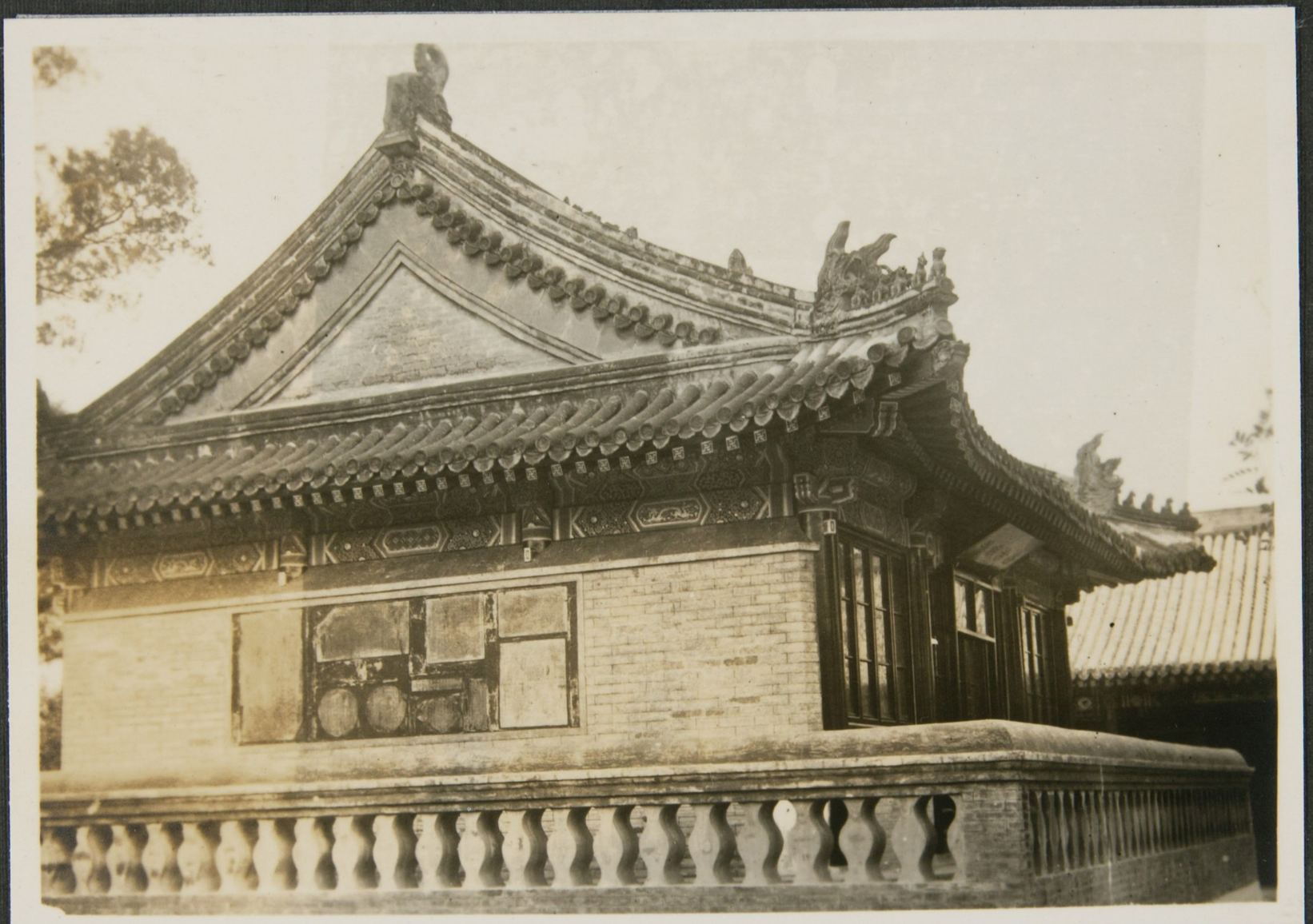
太廟の石の階段は瑞雲と龍の彫刻で出來てゐる。その昔皇帝親祭の際品三位以上の臣のみがこの石の階段の通行を許されたものである。歴朝の大臣宰相が、衣冠束帯に木履を穿いて眞面目な顔をしてこの石段を轉ばぬやうに用心して登る時の顔を想像すれば、苦笑しながらそこにまた、祭典の意義が如何に重大であつたか偲ぶことが出來る。

（亞細亞大觀第十五輯九回五）

寶禪寺

（北京）

寶禪寺は護國寺街の西、寶禪街の北にあり即ち元の大承華普慶寺である。成化庚寅年の建立にかかり後朝廷に聞し『寶禪寺』の額を賜つた。寺内老木欝蒼靜寂の氣充ち、神韻寵るの感がある。兎に角、北京に於ける古刹として知られてゐる。



寶禪寺

（北京）

寫眞は寶禪寺の一部を示したものである。六朝時代建立にかゝる由緒ある古刹であるが特に有名なのは唐以來の碑文を蒐集し保存してあることである。

寺頭雙塔磚

（北　京）

磚塔は西四牌樓南大街路の西にある。塔の由來は、元代の名僧萬松老人入寂の地として紀念塔として建てられたのに始る。その高さは十五尺、七級である。磚塔は二基あるを以て雙塔と呼ばれてゐるが、金時代の建物として有名である。

（亞細亞大觀第十五輯九回八）

護國寺

（北京）

護國寺は護國寺街にあり、寶禪寺と向ひ合つてゐる寺の原名は崇國寺と唱えてゐた。寺中にはもと丞相、明の姚廣孝等の像があつたが今は殘つてゐない。が、毎月七八兩日に行はれる廟會はなかなか盛んなもので、いろいろの商賣が雲集して市が立つ有樣である。寫眞は、護國寺の元碑と云つて、寺の由緒を物語る古い碑である。

（亞細亞大觀第十五輯九回十）

護國寺

（北京）

護國寺は北京に於ても古い寺として有名であるが、寺内にある元の牌樓とともに、元代の獅子も有名である。一見して判るが、その彫刻の妙はその時代の美術と藝術と技術を物語り、工藝文化の發達を伺ふにはこれ以上の物はないと云つてもよい程である。古く荒廢した寺院に、元碑二基獅子一基か淋しく殘るのもまた一沫の寂しさとともに妙味を感ずる次第である。

（亞細亞大觀第十五輯九回九）

南京の点描

第百七十八回
第十五輯九回

内容

南京風景……一
南京の城廓……二
寺……三
城……四
臺……四
莫愁湖の展望……五
明の孝陵……六
明の孝陵武人石像……七
明の孝陵文人石像……八
明の孝陵の石像……九
石獅子の像……十

記事

鶏鳴……三
南京の沿革……島崎役治
撮影

大連市山縣通り一九三
發行所 亞細亞寫眞大觀社
電話②六二三五
振替口座大連七一八
（毎月一回發行）

版權所有 不許復製

大連市山縣通一九三
編輯人 青山捨夫
同
發行人 島崎役治
大連市三河町二一
印刷人 鈴木周哉
發行所 亞細亞寫眞大觀社

南京の沿革

島崎役治

南京は古來幾多の英雄の興亡の歴史を遺せし地にして南京に都し、六百有餘年を過した明清兩朝の政治の跡を離散せしめた悲風慘雨の歴史は今尚ほ吾人の胸に響くものがあらう。明太祖の寵妓、蓋莫愁の傳說、第一次革命に戰死せし數百士の墳墓を營み、孫文中山先生の一大碑文復は、明初の英雄徐中山の樓が、存しまた支那時代の偉傑孫中山先生の大墳塋等、古今幾多興亡の史蹟を尋ねるには遑もない程である。また更に、日支事變には我が皇軍の攻略となり、今や東亞建設の進展、併せて中國新政權の樹立と近からんとし、東洋平和の輝かしい道程に立つ南京の前途は、更に洋々たる春の海の如く、擴大且つ永遠の希望に滿ち溢れてゐてゐる。今この蒼亡たる、都城南京の沿革を左に速記するもまた、住昔の追憶に新なるものがあらうと思ふ。

南京は古來、帝都としてその史跡は頗る古い。遠く春秋には吳に屬し、戰國の時は楚に從ひ、初めて金陵邑を置かれ、秦の始皇は氣を洩さん爲め鐘阜を鑿ち、秣陵と改め、三國の時に吳の孫權が建業に都せりとあるは、即ち此の地を指すものである。東晋の武帝に建康、隋に蔣州を置き、唐の立德年間に始めて江寧と稱した。宋の武帝も玆に都したが、其の後幾變遷を經て、明の太祖亦都城を卜し應天府と稱した。かくの如く、歴朝はその名を異にし、金陵、秣陵、建業建康、應天府等色々に稱呼せらたが、後ち成祖の時都を燕京（今の北京）に遷してから自から南の舊都を南京、北の新都を北京を稱するに至つたのである。清朝に及び江蘇、安徽、江西、三省の省府となり、西江總督を置いたが、西紀千八百五十三年に至り、長髮賊の占據する所となり、大平王洪秀全の居城たること實に十三年、近くは革命の役に孫文が臨時大總統として名乘を上げ、第二革命には北軍馮國璋は浦口より江を下つて下關に迫り、張勳の兵は揚州から鎭口に出で南京の背面を衝いたので南軍支ふる能はず、遂に敗走したることは、既に人の知るところである。一千九百十四年、新地方官制の改定さるに及び、將軍使巡按使等を置くに至つた。此の地は千八百五十八年、六月清佛條約、千八百六十五年、清白條約に依り、千八百九十九年五月一日の開港場たり。更に蔣介石政府も日支事變起り我が皇軍の戰略に至るまで國民政府の首都として其繁榮せし所であつた。現在は、中華民國の維新政府、我が皇軍の總司令部もこゝに置かれてゐる。汪兆銘氏の新政府も今に其の成立を見んとし東亞建設の中心地として將來の發展を期し建設の槌の響きは更に世界の平和に向つて呼びかけてゐる。

南京風景

（南京）

南京は、爾來六百有餘年間明清の雨朝を興亡離散せしめたる。悲風慘雨の歴史を遺せるの地、往昔の英雄の心緒を想ひ、郊外の台地に立でお霞んだ。家並が軟く浮んで郊外に伸びた。道路は白く曲折しその行人の姿にも早春の麗かさが流れて中支の特色を示してゐる

（印畫複製を禁ず）

明の孝陵

（南京）

朝陽門外約三哩、鐘山の南西麓にあり、明の太祖洪武帝の山陵にして其妃馬皇后を合葬してある。中に大明孝陵神功聖碑あり、永樂十一年九月嗣皇帝の建つる所、廓門を入る處に明の孝陵の額あり山陵の周圍に磚壁を繞らし、規模廣大なれど殿樓は門髪賊の乱に燬けて荒草離々たるものだ、陵の後は鐘山にした前方に金陵を控へ、影勝の地にあり、支那に於ける皇帝の陵墓としては最大のものである

明太宗孝陵の石象

（南　京）

明の孝陵道にある石像象である。その規模の大、様式の稚味等、支那陵墓中の雄なるものである。その大さは實物大ほどあつて手法は簡單古撲である。

南京城廓

（南京）

南京城は支那第一の大城と稱せられ、明の大祖が洪武年間七年を費して創築したもので あつて、南京鐘山の麓より、西北楊子江々岸に亘り高さ約三十尺乃至五十尺周圍約三十三哩の磚壁を繞らし、市街は其の東南部一帯に展開し城門拾三個四門は關だ、九門を以て通路とす、寫眞は西南隅の一方面の景勝觀である。

莫愁湖の展望

（南　京）

莫愁湖は水西門外にある。周圍二里の小湖であるが、南京の麗人莫愁が此處に居りしを以て此の名がある。湖畔に中王徐達が明の太祖上棋を圍みて勝ちたりと云ふ、勝棋樓がある。これは兵變後、會國藩の再建したものである。中王の綠倘を樓上に殘つてゐる樓内に莫愁の像ありこれを抄本として賣つてゐる。聯て華嚴庵あり樓に茗茗をすゝり乍ら眺望する景殊に優れ、湖中敗荷多ければ〇ければ初夏の候が最も其絶賞とするに足る。

（亞細亞大觀十五輯十回五）

石獅子

（南京）

明の太祖洪武帝の山陵、陵道には七八十歩毎に石造の獅子、駱駝、象、麒麟、馬二對宛道を夾んで立つてゐる。此の寫眞は其の石獅子の一部で、其の雅味に富んだ姿は當時の作者の氣風を偲ばしむるものがある。

明の孝陵の武臣石

（南　京）

明の成祖長陵參道には十八體三十六軀の石人石獸像が道を夾んで左右に對立してゐる。此の石人像は高さ約三メートル巨大なる石材を以て刻まれてゐる。その古陵雅味は往時の手法を偲ぶに足る。

臺城

（南京）

鷄鳴寺北より直ちに西に折れて延長凡そ三百間、之れ梁武帝の創建したる古城趾即ち台城の一部である。蓋し古の台城の北部にして明初金陵を擴張せし時古城の一部をそのまゝに存したるものである。俗稱台城門を入れば華林園にして園中景勝山勝がある。

（亞細亞大觀十五輯十回四）

鷄鳴寺

（南京）

北極閣の東面鷄龍山の中復にある。山門に勅建古鷄鳴寺の額を掲ぐ。此の寺は梁の武帝が行幸して四部の無遮大會を開きたる同泰寺趾で又六朝累代居城（建康宮）の遺跡である武帝が行幸の際此の地にて鷄鳴を聞いたのに因で、寺名が出た。又彼の達磨と物語りし所なりとも曰ふ。現在の寺は明代の建立にして後方の客殿よりは玄武湖鐘山等眺望も亦優れてなる。

（亞細亞大觀十五輯十回三）

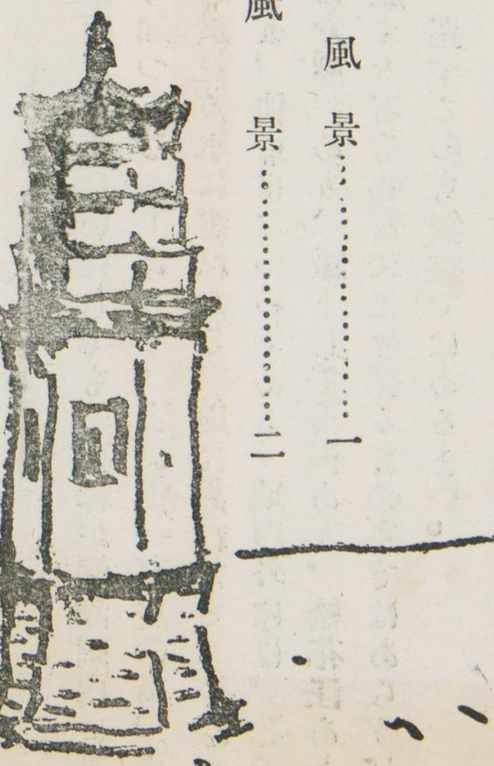
明成祖長陵文人像

（南　京）

陵道を歩せば、石獣の夾立しあり、其の次に華表が一對、建ち、次に文武官人二對がある。これは文人の石像で彫刻の手法の巧致亦た優れてゐる。

滿洲古都風景

第百七十九回
第十五輯十一回



内容

開原城外風景……一
開原風景……二
開原風景……三
遼陽風景……四
東京陵……五
首山堡狼煙台……六
吉林の水吸……七
奉天窯業……八
吉林の家屋の窓……九
公主ゝ陵……十

記事

滿洲古都の處々森田富義

撮影　島崎役治

大連市山縣通り一九三
發行所　亞細亞寫眞大觀社
電話②六二三五

（毎月一回發行）

版權所有　不許復製

編輯人　大連市山縣通一九三　青山捨夫
發行人　同　島崎役治
印刷人　大連市三河町二一　鈴木周哉
發行所　亞細亞寫眞大觀社

滿洲古都風景

森田富義

本輯の寫眞は遼陽、開原、公主嶺、吉林の四地方を紹介した。何れも滿洲に於ける三大古都であつて、歴史上に相當有名な街ばかりである。だから、筆者としても此處に更めて說明を要するまでもないが、滿洲に足を止め、或は滿洲に思を處らすやうな人は直ちに遼陽の古都を考へると淸朝の初祥を思ふであらう、公主嶺にしたところが、公主嶺を知る程の人なら必ず、それが如何なる土地で、歴史上どんな古實があつたかを知るであらう、先づ遼陽は今から約八百年前、遼金時代の都として支那四百余州に號令した土地である。今でも殘つてゐる白塔は、遼陽の白塔として有名なもので、汽車で旅する人も、あの白塔を眺めむれば遼陽城を思ひ、往時、政治、經濟、文化、宗教の華かなりしを知ることが出來るのである。城外數里の地点出產品多く、また日本人の墓碑等も發見されてゐるが、これによつて考へるに日本との交易もやつたのではなからうか、公主嶺は、蒙古王嶺地であつて、寫眞說明の公主陵は、その王族の墓である。現今この地に農事試驗場があり滿洲國の農耕の發達に貢獻してゐるところが多い。

開原は新開地の街である如く見ゆるが實際は、高句麗渤海國時代より開化した街で、その頃既に三萬の衙を置いた舊都で、これが今の開原城である。だが開原は舊都としての開原よりも、新都、即ち特產物集散地の開原と云つた方が通りがよく、それほど附近の大豆が集つて來るのである。一時は日本でもこの地に特產物の取引所を置いた程で、市街や驛は、或は大豆のために出來た街かも知れないのである。

古都吉林に就いて詳細なる說明は出來ないにしても、吉林が滿洲國內にある舊都である位いのことは誰れでも知つてゐるであらう、古い街、歴史の街、由香しい街、雅味ある街、滿洲國內に於ける水に惠れたる、山に惠れたる、平野に惠れたる街と云へば吉林のことであり、他にはないのである。城內外には、孔子廟あり、關帝廟あり、北山にはまた寺廟があり、瞰下して市街あり、松花江あり全く遊覽の地である。先づ滿洲に旅する者は物質文化を探るも必要ではあらうが精神文化の探究には吉林の古都を一巡するのも無益ではあるまい。

開原城外風景

（滿洲國）

あと幾つを渡つた目の前にある馬車は乘用馬車であるが、左手の目に見えないところには、大豆を連んで來た馬車で一つぱいである。

開原は豆と高粱の集散地として有名な街である。謂ば大豆と、高粱で出來あがつた街であると云つてもよい、寫眞は、冬期結氷中に幾十里と離れた農村から、百姓が大豆や高粱を馬車に積んで、野を越え、山を越え、川を渡つて開原の街に賣りに來たところである。

開原風景

（滿洲同）

開原城内に這入ると本通りに寫眞の如き塔がある。何時の世に出來たものか、何の塔であるか筆者は知らない、然し石の古さを以つて見れば、開原の街もこの石塔と同じい年代街であることを察することが出來る。

（亞細亞大觀十五輯十一回二）

開原風景

（滿洲國）

開原風景として城内本通の塔を紹介したが今度の寫眞も亦石塔である。街の道路の眞中に妙な形の塔がある、何か名があるかも知れないが筆者は塔と云ふより他に謂ふべき名を知ない。開原城内を散策した者はこの塔を何氣なしに見て通るであらう。

遼陽風景

（滿洲國）

遙るか見える塔は遼陽の白塔である。古き遼金の時代の建立として有名である。寫眞のすぐ前にある物は煉瓦工場である。

東京陵

（滿洲國）

東京陵は遼陽の北、大子河の畔にある。昔し清朝が奉天に遷都する前まで、この地に都を置いたところである。

（亞細亞大觀十五輯十一回五）

首山堡狼煙台

（滿洲國）

橘中佐で名高い首山である。岩石の山を見ると、如何に當時の戰爭が苦戰であつたかが想像される、頂上の塚のやうな築造物は昔しの狼煙台で、これが今日の傳令の役を果し、或は無電の役を務めたものである。

吉林の水汲

（滿洲國）

吉林の街を歩いてゐると騾馬が水桶を積んでトコトコと歩いてゐる、これが即ち吉林の水汲風景である。一荷何錢か知らないが吉林の街の住民はこれを買つて生活してゐるのである。夏秋の水汲はまだいいが、冬ともなれば水桶からこぼれる水は氷となり水柱となり馬の鼻息は凍つて實に寒さうな風景である。

（亞細亞大觀十五輯十一回七）

奉天の窯業

（滿洲國）

寫眞は奉天の窯業工場である。幾十百となく作られたカメは釜に入つて素燒となり藥をかけた本燒となつて。滿洲國人の家庭用品となつて市場に賣出されるのである。

（亞細亞大觀十五輯十一回八）

吉林の家屋の窓

（滿洲國）

寫眞は吉林の家の窓を示したものである。或は窓と云ふより障子と云つた方が判りいいかも知れないが、どの家の窓の障子も寫眞のやうな雅味ある細工をしたものである。これによつて見、これによつて考へて見ると、吉林人の趣味の深さも察しられるし、その風流ぶりも判明されるが、更に深く考へると、古都としての吉林を思ひ、富裕な吉林人士を偲ぶことが出來る。

公主陵

（滿洲國）

公主陵は公主嶺の西方二里の地點にある。昔し、この地方を領した豪族の跡として、その豪族即ち當時の土地の國主を葬り祀つた跡と云はれてゐる。古老に聞けば、面白い傳說があり口碑が殘つてゐるが、紙面の都合で此處には說明出來ない。

（亞細亞大觀十五輯十一回十）

中支風俗の点描

第百八十回
第十五輯十二回

内容

蘇州の機織……一
蘇州の綿布……二
蘇州の籠……三
杭州附近の子守籠……四
折江省風景……五
錢塘江沿岸……六
錢塘江附近の漁家……七
杭州民船碇泊……八
蘇州の風景……九
支那の僧侶……十

記事

中支名勝案内　森田富義

撮影　島崎役治

大連市山縣通り一九三
發行所　亞細亞寫眞大觀社
電話②六二三五

版權所有　不許復製

大連市山縣通一九三
編輯人　青山捨夫
同
發行人　島崎役治
大連市三河町二一
印刷人　鈴木周哉
發行所　亞細亞寫眞大觀社

（每月一回發行）

中支の名勝案内

森田富義

蘇州上海から五四哩弱約一時間四十分、南京から一四〇哩弱約五時間を要するところに蘇州城がある。蘇州は歴史上有名なばかりでなく景勝の地としても赤有名で、支那を旅する文人墨客は必ず一度遊覧するところである。街は大小の道路が交通し到るところに水溝があつて、舟便に良くまた穹窿狀橋が架してあつて交通の便益を備えてゐる。城内には官公署、外國公館、學校、病院、劇場、旅舘等があり、市街は段賑を極めてゐて、商賣も賑はつてゐる。歴史上有名な寺廟も多く、孔子廟、雙塔寺、北寺塔、虎丘禪寺寒山寺等がある。虎丘禪寺の慘事は十萬人の靈が白虎と化したと保へられてゐる。特に寒山寺は張繼の楓橋夜泊の詩で有名で、明朝の書家文徵明の書を刻した楓橋夜泊の詩の古碑があるが星霜風雪幾百年を經てゐるので、碑面崩碎して字體か判然とせず現在では近代の書家俞越の書を代刻し、その石摺を買つてゐる。靈巖山天平山の名勝も蘇州の近くにあり支那遊覽の土の杖を曳くべゆところである。

杭州上海から滬杭用鐵路で四時間半のところに杭州がある。府城には蘇州と同じく、官公署外國公館あり、學校、病院、劇場等があつて、商工業は願る賑やかである。寺廟は、夕照寺、圓覺寺、雲居寺、廣潤寺、廣林寺、鳳林寺、天長寺、法輪寺、藥王廟、東嶽廟、關帝廟、玄妙觀等がある。何れも古刹として有名で、由緒もあり、觀光團の集ることは蘇州と異ることばない、

錢塘江杭州城の近くにある錢塘江は水路舟運の便を以つて知られてゐるのみでなくこの錢塘江は海潮の滿干によつて更に面白い現像を呈することでもり、流下す江水と接するところの水勢の衝突は激しいもので、轟音を發し、江中に水壁を作り、白沫は奔馬の走るが如き態を呈するのである。この時の船の航行は全く危險であるが、江上沿の舟人は巧にその水勢を途けて雜を免れるのである。

景勝地として吳山があり城隍山とも云つて、明の大祖が「提岳百萬西湖上、立馬吳山第一峯」と賦したところである、府城を目下に依腑瞰し更に眼界の四圍は實に雄大である。

蘇州にしろ杭州にしろ、南畫の風景に富むところで、此處に來たつて始めて、畫の眞を知り、南畫の味ふことを知るのであつて、支那の幽山深谷の景は全く祥韻の極致を與へてゐることを始めて知るのである。支那に來て始めて大陸を知る如く、支那に來て始めて風景を知る者も少くない筈である。

蘇州の機織

（中支風俗）

寫眞は蘇州名産の綿布を織るところである。まだ機にかける前の糸はるの圖で、幾十と立つてゐる綿糸をはるて織物の縦を作るところである。春の日ざしの暖い日に、庭に出て、小唄を唄ひ乍ら糸をはるところきは、近隣の姑娘がそつと覗きに來る位い慾長で且つ情緒豊なものである。

蘇州の綿布

（中支風俗）

蘇州は綿布の産地として有名である。寫眞第一圖は織機の前哨曲であつたが、本圖は既に機から下ろされた綿布である。悠ろして、山と積まれた綿布は、一日天日に乾して、織屋から商人の手に渡り、商人から商人の手に渡つて農商民の衣類となるのである。

蘇州の籠

（中支風俗）

支那にはまだ籠が殘つてゐて交通機關の一助となつてゐる。山に登るには山籠があり遠い旅をするにも籠が利用され、寺廟に參詣するにも籠でお參するところもある。寫眞は蘇州附近で使用してゐる籠で實に悠長なものである。悠ゐして幾十となく續く籠の行列が通る時は村童ばかりでなく大人も出て珍らしく見送るのである。

（亞細亞大觀　十五輯　十二回三）

杭州附近の子守籠

（中支風俗）

寫眞は抗州附近の農家の風景を示したものである。一家は亭主も媽々も畑に出て働くが家には藁で作つた守籠に乳のみ兒を入れて置くのである。守俗の周囲に收穫してある野菜類は實に見事な出來榮で、この收穫の前には働いても働いても疲れを知らないのが農夫の心情である。

（亞細亞大觀十五輯十二回四）

折江省風景

（中支風俗）

支那折江省の農家の風景である。家の周囲の情態から見ると秋の風景で、漸く米の收穫が終つたところである、秋らしく家の前の流れも和かで岸の物さが送に水鏡となつてゐる眞晝の百姓の一休みと云ふところであらうそ の團樂欒りは悠やましい。

錢塘江沿岸

（中支風俗）

錢塘江に就ては裏に紹介したが、また此處に水鄉錢塘江沿岸を紹介する。この家は、錢塘江岸の半農半漁を業とする家で、江面には家鴨が一匹泣いてゐる。等開な風景であり、只だ氣になるのは家の壁にかかれた樂書であるが、判讀すれば、その意のあるところが察しられるであらう。それによつて察すれば この平和な水鄉にも土豪劣紳の惡の手が延びてゐるのではあるまいか。

（亞細亞大觀十五輯十二回六）

錢塘江附近の漁家

（中支風俗）

寫眞は水鄉錢塘江の漁家である。水中に柱を建て、竹を締んで壁とし屋根は漸く雨を凌ぐ足るや否や　然もこの水上の家には寢室もあれは厨房も出來てゐるのである。漁家だけあつて葉舟一隻、竹籠も備はつてゐて、江上に漁し、その漁穫は近隣の街や邑に賣して、生計を建ててゐるのである。

（亞細亞大觀十五輯十二回七）

杭州民船碇泊

（中支風俗）

機何運霞寂の

水で有名な杭州には寫眞のやうな舟が交通機關であり貨物運送の役目を果すのである。何處から來たがこの民船は杭州の街に沿れた運河に入り錨を下し一泊したところで、今朝霞の中に炊烟を上げてゐるところである。靜寂から入らんとする朝の明さは實にいい氣持のものである。

蘇州の風景

（中支風俗）

蘇州坑州は支那の水郷として有名である。寫眞は蘇州の街に流入した流に架した橋で女が橋下の水に親しむ圖である。蘇州の街には悠うした橋が架せられ、舟遲によつて交易が行はれてゐるのである。

侶僧の那支

（中支風俗）

佛數は印度に起り支那に傳はり、支那から日本に傳はつて今の日本の宗教は佛教全盛である。然るに支那の佛教は今は寺院を守の僧侶によつてのみ殘つてゐると云ふ風で、でうかすると道教に押され勝ちである、が、然し佛弟子は依然として寺にあつて、式らかの信徒を有してゐる。寫眞は支那僧侶の圖であるが、服裝からすれば矢張り佛教で日本の僧侶の服裝と似てゐる。

（亞細亞大觀十五輯十二回十）